

鳥類



鳥類

1. 京都府の鳥類相

京都府では、1999年時点で321種の野生鳥類が記録されていたが、2012年時点で344種に増加した。観察者の多い京都市周辺から南部の情報が多い一方で、中部地域や北部地域の情報が不足しているという傾向があるものの、他の分類群に比べると鳥類の生息状況はよくわかっているといつて差し支えなく、おおむね生息の概況はおさえられている。

以下では、北から順に主な鳥類生息地の概略を述べる。

若狭湾にある島々の中で、鳥類の生息地として重要なのは冠島と杓島である。冠島はタブやアカメガシワに覆われ、オオミズナギドリの集団営巣地として天然記念物に指定され国設鳥獣保護区ともなっている。ハヤブサやカラスバトの生息地でもあり、春秋にはセンニュウ類やムシクイ類など小鳥類の渡りの中継地としても重要である。杓島は数千つがいのウミネコの営巣地となっているほか、カンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメ、オオミズナギドリなどの海鳥の営巣地ともなっている。

日本海側にある久美浜湾、宮津湾、阿蘇海、舞鶴湾といった内湾は、冬期にカイツブリ類、カモ類、カモメ類などの水鳥の集団越冬地となっている。その中でも、阿蘇海にコハクチョウが、久美浜湾にオオハクチョウが少数ながら定期的に渡来することは注目される。冬期、沖合にはウミスズメ類やオオハム類が渡来するが、岸からの観察が困難なためその実態はよくわかっていない。

府内の大部分は山地に占められているが、まとまった面積の自然林は限られている。数少ない自然林の中で最も鳥類の生息地として重要なのは、由良川源流の南丹市美山町にある京都大学芦生研究林である。ここにはブナ、ミズナラ、トチなどの天然林が多く、アカショウビン、コガラ、キバシリなど多くの鳥類が生息している。また、芦生研究林とともに、八丁平や大江山などブナ林のある地域には、コノハズク、コルリ、コマドリ、ゴジュウカラなどが生息している。丘陵から山地の比較的まとまった山地には、クマタカ、オオタカ、フクロウなどの猛禽類が広く生息している。

府内には規模の大きい湖はなく、池の数も隣接府県に比べると少ない。その中で、カイツブリ、バン、カモ類などの生息地として知られている場所に、京都市の広沢池や深泥池、亀岡市の平の沢池などがあげられる。また、天ヶ瀬ダム、喜撰山ダムといった山間部のダム湖もカモ類などの水鳥が渡来することで知られており、天ヶ瀬ダムではオシドリがよく観察される。

河川もまた鳥類の生息場所として重要である。南部地域にある宇治川の向島地区にある河川敷内には近畿

地方でも最大級の広大なヨシ原が広がっており、夏から秋にかけてツバメ類の集団ねぐら地となることが知られている。桂川の久我井堰堤上流部を中心とした範囲は、多数のカモ類をはじめとした水鳥の越冬地となっている。木津川は、中州がチドリ類やコアジサシの集団営巣地の記録のある点で注目される。一方、鴨川のような市街地を流れる河川は、浅水部が多いこともあって、サギ類、カモ類、ユリカモメの越冬地となっている。

農耕地にも様々な鳥類が生息する。中でも府内で特筆すべきは南部地域の巨椋干拓地である。ここは、かつて巨椋池があった場所であり、現在は干拓されて水田地帯となっている。ケリが多数営巣しており、春秋の渡りの時期には多種のシギ、チドリ類が立ち寄る。越冬する小鳥類も多く、ノスリやコミミズクといった猛禽類も見られる。オジロトウネン、ホウロクシギ、ハイイロチュウヒ、コチョウゲンボウ、タマシギなども観察され、府内で最も重要なシギ、チドリ類の渡りの中継地であり、同時に重要な猛禽類の越冬地でもある。

2. 種の選定基準

鳥類では、2002年の初版レッドデータブックおよび2013年のレッドリスト改訂にあたっては、ほぼ同じ考えで種選定およびランク判定を行った。

京都府産鳥類リストの中で、多数種、迷行種、情報不足種を除きランク検討種とし、多くの観察者から府内の各種の個体数規模、減少の有無に関する情報を得て、個体数規模と減少の有無を組み合わせる以下のような考えで判定した。なお、鳥類は長距離の渡りをする種が多く、それぞれの種の繁殖個体群、越冬個体群、渡りの時期に中継地に滞在する個体群別に評価して判定し、より厳しい判定をした個体群の結果をもとに種としてのランク判定をした。

各ランクの選定基準は以下のとおりである。

- 絶滅種 過去に継続的な繁殖や定期的な渡来の記録があるが、現在は継続的な繁殖や定期的な渡来をしていない種(かなり近い個体群はいても断定は難しい)。
- 絶滅寸前種 (個体群の)個体数が極めて少なく、大部分の個体群が減少している種。
- 絶滅危惧種
 - A: 個体数は極めて少ないが、大部分の個体群が減少してはいない種。
 - B: 個体数が少なく、大部分の個体群が減少している種。
- 準絶滅危惧種
 - A: 個体数は少ないが、大部分の個体群が減少して

はいない種。

B:個体数は少なくないが、大部分の個体群が減少している種。

- 要注目種 繁殖個体数が多く、特に繁殖個体群は減少していないが、島嶼に繁殖するなど限られた営巣地で繁殖する種。

2013年のレッドリスト改訂にあたっては、2002年の京都府レッドデータブックの判断内容とその根拠を改訂作業用ウェブサイトなどによって府内の日本野鳥の会京都支部ほかの野鳥観察者に示し、改訂につながる情報や意見を寄せていただき、レッドリストの改訂の検討をした。

3. 選定種の概要

2013年の改訂レッドリストでは鳥類は108種が掲載された。

希少カテゴリー別の種数は(()内は2002年における種数)、絶滅寸前種が8種(8種)、絶滅危惧種が48種(49種)、準絶滅危惧種が50種(45種)、要注目種が2種(2種)、計108種であった。

京都府では2012年時点で344種(既報告に1種増加)が記録され、このうち31.4%の108種がレッドリストに掲載された。2002年では京都府で321種が記録されており、32.4%の104種がレッドデータブックに掲載されていた。京都府で記録される鳥種の約3割が、何らかの希少性の指摘がされ保護する必要があるという状況に変化はない。

生息環境別に種数を見ると(()内は2002年における種数)、海域、海岸域、離島が17種(13種)、河川、池沼、ヨシ原が17種(14種)、水田、畑地、草地在31種(30種)、山地、山林が40種(43種)、都市緑地など他の環境が3種(3種)、計108種であった。基本的なパターンは変わっておらず、府内の山地、山林などの森林環境とともに、海岸域や河川、水田などの湿地環境が鳥類の生息環境として重要であることが、あらためて確認された。

選定種を生息環境別に見ていくと、それぞれの環境における課題が見えてくる。

北部の海域、海岸域、離島の環境では、冠島、杓島といった島嶼の環境を厳重に保全することが必要となっている。これらの島は、国や舞鶴市の天然記念物、あるいは国の鳥獣保護区などとして法的に保護されているが、継続的な鳥類および生息環境のモニタリング調査にもとづいた保全策の実施が必要である。杓島における繁殖実態が近年明らかになりつつあるヒメクロウミツバメやカンムリウミスズメの保護のためにはドブネズミなどの侵入を警戒することも必要である。北部の沿岸帯沿いでは、ホオジロガモやクロガモ、ハクチョウ類を含む水鳥の越冬地の保全が重要な課題である。

山地、山林を生息環境としている種の生息環境保全

のためには、ブナ林などの奥山の自然林だけでなく、里山など都市近郊にある山林の保全を意識する必要がある。

コノハズク、マミジロ、アカショウビンなど絶滅危惧種以上のランクに選定されている種は、まとまった面積の自然林が存在する限られた地域で確認されることが多い。芦生、八丁平、比叡山など個々の地域に、レッドデータ種がどのように生息しているかを詳細に把握し、それぞれの地域の保全上の課題を把握することが重要な課題である。

またハチクマ、オオタカ、サシバ、フクロウなど、いわゆる里山で繁殖する猛禽類も多く選定されている。過去にあったような急速な丘陵地開発はにぶっているが、なお課題が残る。奥山も含め、里山は、シカ害やナラ枯れといった深刻な問題をかかえている。単なる保護だけでなく、持続的に地元の森林資源を利用する循環型の社会をどうつくるかが、山地、山林の生息環境の保全を進める上での課題となっている。

河川、池沼、ヨシ原といった生息環境では、木津川などの砂礫洲で繁殖する(または繁殖記録のある)シロチドリ、コアジサシ、イソシギなどの営巣環境の保全が必要である。一方、ヨシゴイやチュウヒ、ツリスガラなどの種にとって、宇治川向島地区のような規模の大きいヨシ原の保全が重要な課題となる。

水田、畑地、草地は、巨椋干拓地の広大な水田、農耕地環境を利用する多くのシギ、チドリ類やコミミズク、ノスリ、コチョウゲンボウなどの渡り期中継地や越冬地の生息環境として重要である。最近、豊かな生物多様性も提供可能な水田経営への関心が高まっている。多様な鳥類の生息環境を保全する観点からも注目したい。

都市環境でも鴨川の河川敷におけるチドリ類、繁殖を開始したチョウゲンボウのように絶滅危惧種や準絶滅危惧種が生息している。都市環境におけるこのような種の生息環境保全を考えることも、多くの人々に生物多様性保全の意義を普及、啓発する上で重要である。

4. 改訂概要

主な改訂の理由は以下である。

3種(チョウゲンボウ、コウノトリ、マミジロ)は府内であらたに繁殖が確認もしくはその可能性が確認された。チョウゲンボウは京都市内で、コウノトリは京丹後市で繁殖を開始し、マミジロは南丹市芦生で繁殖期の生息情報が得られた。いずれも極めて少数の繁殖個体群であることから、チョウゲンボウは準絶滅危惧種(越冬個体群)から、コウノトリはリスト外(迷行種)から、マミジロは準絶滅危惧種(通過個体群)から絶滅危惧種となった。

コウノトリは、兵庫県豊岡市における個体群復元事業により隣接する京丹後市でも少数個体が周辺生息

するようになり2012年に営巣を開始した。

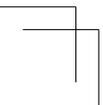
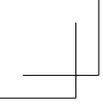
オシドリ、アオバト、コルリ、ジュウイチ、キバシリは、2002年の情報よりは観察記録があることから、絶滅危惧種から準絶滅危惧種となった。イワツバメとタカブシギは、観察結果(減少しておらず、少なくはない)からレッドリストから外した。さらに、オオマシコ、コイカル、ホシガラスもレッドリストから外した。これらの種は定期的に特定の地域に渡来する可能性がない迷行種と判断しなおしたためである。

本来2002年時点で、対象種として検討すべきだったがもれていてリスト外となっていた種で、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ヒメウ、タゲリなどは、準絶滅危惧種(越冬個体群)となった。クロガモも対象種の検討からもれていたが、京都府だけでなく周辺県の海岸域における越冬期の調査でほとんど確認されておらず、絶滅危惧種(越冬個体群)となった。

執筆者 須川恒、中村桂子、狩野清貴、
梶田学、脇坂英弥、和田岳、塩崎達也



鳥類



★★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002)絶滅寸前種

環 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

ウズラ

キジ目キジ科
Coturnix japonica



鳥類
(絶滅寸前種)

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少なく、近年減少している。
形態	全長20cm。丸い体つきで尾は短い。頭上から体の上面は褐色で黒と淡黄色の横斑と縦斑がある。眉斑は黄白色。下面は淡黄褐色で、胸から脇には赤茶色と黒の縦斑がある。嘴は灰色。オスの喉は赤茶色、メスの喉は白っぽく上胸に2本の黒帯がある。幼鳥はメスに似るが、上胸の黒帯を欠き、脇は横斑か点斑がある。 ◎ 近似種との区別 コジュケイは大きくて尾が長く、褐色味が強い。
分布	夏鳥として本州中部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬する。九州でも繁殖例がある。冬には大陸から渡来したものも越冬する。近年生息数が減少しており、府内ではごくまれに観察されるにすぎない。 ◎ 府内の分布区域 北部地域、南部地域。
生態的特性	平地から山地の草原や農耕地に生息する。繁殖期は北海道などで多く確認されていたが、近年確認例が減少している。食物は様々な植物の葉や種子、昆虫、クモ類である。地上で営巣する。造巣はメスが行い、一腹8~13卵を産む。メスのみが抱卵し、17~20日でふ化する。「グワックルル」などと大きな声で鳴く。繁殖期の4~6月はつがいか家族で過ごす。秋・冬には大きな群れになることがある。
生息地の現状	府内では、冬期にごくまれに広い農耕地などで観察される程度である。飼育されている個体も多く、かご抜けの可能性があるので、本当に越冬しているかどうかの判断は難しい。
生存に対する脅威	耕地の圃場整備が影響を与えている可能性がある。また過度の狩猟が急激な減少の背景にあるのかもしれない。
必要な保全対策	全国的に本種の減少の原因を把握する必要がある。まず、かご抜けか自然個体群かどうかを確認する手法を確立する必要がある。越冬状況だけでなく、国内で繁殖が確認されている地域の現況調査、および越冬地を探る調査が必要であろう。国内だけでなく、サハリン(樺太)でも日本と同じ亜種と思われる種の繁殖数が減少していることが知られており、極東全体も視野に入れる必要がある。

文献 日高(監)(1997)、黒田(編・監)(1984)、真木、大西(2000)、ネチャエフ(1995)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002) 絶滅寸前種

オオハクチョウ

カモ目カモ科
Cygnus cygnus

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少なく、近年減少している。
形態	全長140cm。翼開長225cm。雌雄同色。嘴は先端は黒く、上嘴基部が黄色で、黄色部は嘴の半ばより先に達し先端は尖っている。幼鳥は全体が灰褐色。 ◎ 近似種との区別 コハクチョウは少し小さく、成鳥は嘴の黄色部が小さい。
分布	コハクチョウの繁殖地よりも南のシベリアタイガ地帯で繁殖し、冬鳥として本州以北、特に東北地方や北海道に多く渡来する。府内では久美浜湾にのみ極めて少数が渡来する。 ◎ 府内の分布区域 北部地域(京丹後市久美浜町)。
生態的特性	越冬地では湖沼や河川をねぐらとし、そこから朝早く起き出して、湖沼や田圃、給餌場などの採食地へ移動する。春先には求愛行動がよく見られるようになる。営巣地には5月中旬に出現し、5月下旬～6月上旬に、直径2mの巣を枯れ草などでつくり、一腹3～5卵を産み、メスだけで約31日抱卵する。ふ化後雛たちは親鳥に守られながら、スゲ、ミツガシワなどのある浅い湖沼で過ごす。9月下旬に雛は飛べるようになり、10月中旬までには親鳥とともに越冬地に渡る。
生息地の現状	久美浜湾では1980～81年冬から1994～95年冬までは、毎年12～54羽の渡来が確認され、最多は1982～83年冬の54羽であった。しかし、1995～96年冬から2000～01年冬までの間は、0～3羽と激減している。久美浜湾では河口や海岸で休息し、海草や浮いているもの、小さな貝を採食する。久美浜湾ではウインドサーファーや水上バイクの増加による攪乱があり、冬期にも生息地近くで土木工事が行われている。
生存に対する脅威	ウインドサーファーや水上バイクの増加による攪乱や、冬期にも生息地近くで行われる土木工事が、安全な生息環境に脅威を与えているものと思われる。また蛍光色や黄色や赤色に警戒を示し、交通安全の黄色い帽子などにも反応する。
必要な保全対策	久美浜湾海岸域の保全計画を策定し、オオハクチョウが渡来する可能性のある海岸域の冬期の土木工事中止やウインドサーファーなどの規制を行う必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、永井(1995)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002)絶滅寸前種

カラスバト

ハト目ハト科
Columba janthina

環 準絶滅危惧 (NT)



鳥類
(絶滅寸前種)

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は極めて少なく、近年減少している。
形態	全長40cm。ドバトより大きく、尾は比較的長い。雌雄同色。体は黒色で紅紫色や緑色の金属光沢がある。嘴は先が淡黄色で基部付近が淡青緑色。足は赤い。頭部はヘルメットをかぶっているような感じの膨らみがある。側頭の羽毛を横帯状に立てることが多い。 ◎ 近似種との区別 ドバトは小さく、体形が異なり、黒色型でも嘴や蠟膜の色が違う。尾は短く、羽ばたきは速い。生息環境も異なる。
分布	日本と朝鮮半島南部の海岸、濟州島、鬱陵島のみに分布する。国内では、留鳥として本州中部以南の島嶼に分布する。春秋の渡り期には、日本海側の島嶼で観察されることが多く、移動や渡りをするものもあると考えられる。府内では、舞鶴市冠島にのみ生息している。 ◎ 府内の分布区域 北部地域。
生態的特性	主に木の実を食べており、木の実を求めて小規模の移動を頻繁に行い、採食は樹上でも地上でも行う。シヤタブなどの実が多い場所には多くの個体が集まることがある。繁殖期は2~9月頃までだが、5~6月が多い。秋・冬期に繁殖した記録もある。よく茂った照葉樹林の樹上に小枝を粗く組み合わせて外径24~35cmの皿形の巣をつくるが、樹洞や地上で営巣することもある。一腹卵数は1卵で、卵は白い。
生息地の現状	冠島は全島がタブやシヤの林で覆われており、オオミズナギドリの集団営巣地となっている。以前ほどは間近に観察されることが少なくなっており、生息密度が減少していると思われる。
生存に対する脅威	冠島そのものは、オオミズナギドリの集団営巣地として舞鶴市によって管理され保護されている。それに関わらず、原因は不明ながら生息数は減少している。
必要な保全対策	全国的にも、照葉樹林の伐採に伴い急速に減少しつつある。その生態や生息状況は詳しくはわかっておらず、詳しい生態調査と生息地の環境保全の必要性が指摘されている。冠島においても、カラスバトの生息実態を把握するための詳細な調査を実施し、個体数の減少原因を明らかにする必要がある。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002) 絶滅寸前種

ミゾゴイ

ペリカン目サギ科
Gorsachius goisagi

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は極めて少なく、近年減少している。

形態

全長49cm。雌雄同色。ゴイサギより小さく嘴は短い。頭上は赤栗色、体の上面は暗栗褐色。雨覆は栗褐色で風切羽は黒く、先端は栗色。

◎**近似種との区別** ズグロミゾゴイは頭頂が黒く飛翔時は風切羽の先端に白斑がある。

分布

夏鳥として本州、九州、四国、伊豆諸島へ渡来する。冬期は、主にフィリピンに渡るほか、台湾や南日本でも越冬する。府内での記録は少ないが苔寺、石清水八幡宮(八幡市)、鞍馬寺、芦生で観察された。ごく少数が繁殖していると考えられていたが、近年観察情報が減少している。

◎**府内の分布区域** 中部地域、南部地域。

生態的特徴

低山の森林に生息。谷や沢筋、湖畔などでサワガニやミミズなどを捕食。繁殖期には、雨や曇りの日の日暮れから数時間と夜明け前の数時間、ウシガエルのような「ポォーッ、ポォーッ」(近くでは「オッポォーッ」と聞こえる)という声で5~8声連続して不気味に鳴く。コロニーは形成せず単独で繁殖する。巣は丘陵地の小さな沢筋の奥まった場所などにつくられ、クヌギなど地上から数mの高さに小枝を使って粗雑な巣をつくる。一腹卵数は3~5卵。抱卵期間20~27日。ふ化後34~37日で巣立つ。

生息地の現状

10年以上前は、京都市近辺や北山などにある、よく茂った谷川を含む落葉広葉樹林で、少ないながらも観察情報があり、繁殖をしているものと推定されていた。しかし近年は観察記録がほとんどなく、繁殖情報も極めて少ない。

生存に対する脅威

比較的到低山で繁殖することがあるため、低山の森林で行われる開発が脅威となっている可能性がある。また全国的にも個体数が減少しているのは、越冬地における森林開発などが影響している可能性もある。

必要な保全対策

府内の生息情報をまず把握し、その中で繁殖している可能性の高い地域を重点的に調査することによって、生息地の保全を行う方向性を探る必要がある。また全国的にも個体数が少ないと考えられる種であるので、保護に向けての全国的な調査と連携することが必要と考える。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982) 執筆者 須川恒、梶田学

★★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002)絶滅寸前種

カンムリウミスズメ

チドリ目ウミスズメ科

Synthliboramphus wumizusume

環 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

鳥類
(絶滅寸前種)

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少なく、近年減少している。

形態

全長24cm。夏羽では額から頭頂が黒く、冠羽があり、後頭は白い。喉、顔、頸側、胸側は黒く、体の上面は青灰黒色。体の下面は白い。嘴は青灰白色。冬羽では喉は冠羽が短くなり、後頭部の中央が黒い。

◎**近似種との区別** ウミスズメは冠羽がなく、後頭部が黒く、嘴は比較的太くて黄白色。マダラウミスズメの冬羽は嘴が長くて黒く、肩羽は白い。

分布

日本近海の固有種で、留鳥として国内の海域に生息し、冬も繁殖地と同じ海域に留まる個体もあるが、多くは本州中部以南へ移動して越冬する。繁殖地は日本沿岸や沖合の島嶼と韓国南部のみである。府内では、舞鶴市杓島で極めて少数の営巣が確認されている。

◎**府内の分布区域** 北部地域。

生態的特性

繁殖期を除き海上で生活する。潜水して魚を採食する。陸上捕食者の近づきにくい場所に集団で営巣する。巣に出入りするの、辺りがすっかり暗くなった時で、「ジージュッジュッジュッ」などと鳴きながら飛来し、巣穴に入ってつがい相手と出会うと「ジジジ、ピピウピピウククク」と、盛んに鳴き交わす。岩の割れ目や、木の根元、岩や石の下などに3月中旬～4月上旬に2卵を産む。卵は親の体重の22%とかなり大きく、約1週間の産卵間隔がある。約1か月抱卵し、ふ化後およそ2日目の夜、親は雛に付き添いながら、海へと向かう。

生息地の現状

府内では、1971年5月に舞鶴市冠島で夜間の調査の際に1羽が確認され、1973年5月に舞鶴市杓島で抱卵中の個体が確認された。1980年代以降杓島で営巣は確認されていなかったが、2010年に行われた環境省の調査で、杓島の一部で数巣が確認された。1997年1月のナホトカ号重油流出事故の際に、京丹後市網野町の海岸で死体が回収された。杓島は斜面が急で自然崩落による営巣環境の悪化が心配される。

生存に対する脅威

営巣地となっている離島へ釣り人の立ち入りが増え、撒き散らかされたゴミにカラスなどが引き寄せられることや、人の上陸そのものによる営巣環境の攪乱が全国的に大きな問題となっている。さらに、重油流出事故による海洋汚染は大きな脅威である。

必要な保全対策

杓島における営巣状況について専門家による現況調査の継続が必要である。海洋の重油流出事故が起こらないような、また事故が発生した際に影響を最小限にできるような枠組みを整えるべきである。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1979、1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)、吉田(1981)

執筆者 須川恒、狩野清貴

★★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002) 絶滅寸前種

イヌワシ

タカ目タカ科
Aquila chrysaetos

環 絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。個体数は極めて少なく、近年減少している。

形態

全長オス 81cm、メス 89cm。翼開長 170～213cm。日本のワシタカ類の中でも最も黒っぽく見える。体は黒褐色で後頸が金褐色。幼鳥は成鳥より黒色味が強く、風切羽の基部と尾の基部が白くて飛翔中によく目立つ。

◎**近似種との区別** オジロワシは尾は短くてくさび形。オオワシの尾は長めのくさび形である。

分布

ユーラシア大陸からアフリカ大陸北部、北アメリカ大陸にかけて広く分布する。北海道から九州にかけて生息、繁殖する。府内では滋賀県境、福井県境付近で観察される。通過中と思われる個体が観察されることもある。

◎**府内の分布区域** 中部地域(南丹市美山町)、南部地域(京都市)。

生態的特性

国内では、生物の豊富な落葉広葉樹林が広がり、狩り場となる自然草地や低灌木林が伴う山岳地帯に生息する。イヌワシの主な獲物はノウサギ、ヤマドリ、大型のヘビであり、飛行しながら地上の獲物を見つけ急降下して捕獲するか、獲物が現れるのを待ち伏せする。急峻な岩棚や、時には大きな樹木に営巣する。産卵期は 1～2 月。一腹卵数はほとんどの場合は 2 卵で、抱卵期間は約 42 日。最初にふ化した雛は遅れてふ化する雛をつつきはじめ、2 番目の雛は親から餌をもらえずほとんどは死亡する。ふ化後 70～80 日で巣立つ。つがいの行動圏は約 40～100km²だが、隣接つがいの営巣地が遠く離れているところでは、これよりかなり広いこともある。1994 年に北海道を除く全国で確認されているつがい数は 138 にすぎず、繁殖成功率は 1986 年以降急激に悪化し、近年 30% を下回っている。

生息地の現状

滋賀県や福井県で繁殖している個体が、府内にも行動圏の一部を持っており、滋賀県や福井県境界付近の南丹市美山町や京都市北部で観察される。全国的に個体数や繁殖成功率が減少している。滋賀県や福井県でもつがいの行動圏が消滅したり、繁殖成功率の低下が起こっており、府内からイヌワシが姿を消すおそれは高い。

生存に対する脅威

繁殖成功率の低下は、営巣地付近における開発行為や、広大な人工林の植林による餌動物の減少などが要因として考えられる。さらに 1986 年以降、卵がふ化しない例が報告されるようになり、残留性の高い環境負荷物質の影響が心配されている。

必要な保全対策

福井県や滋賀県の関係者と連携して、府内に生息するつがいの行動圏を調査し、高頻度で利用される地域の厳重な保全策を考える必要がある。営巣場所となっている岩棚などが崩落しているような場合は補修などの対策を検討する必要もある。また、卵が未ふ化や雛が成育途中で死亡した場合は、環境負荷物質の影響がないかを分析する必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、永井(1995)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002)絶滅寸前種

コノハズク

フクロウ目フクロウ科

Otus sunia

環 なし

鳥類
(絶滅寸前種)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は極めて少なく、近年減少している。

形態

全長19~22cm。翼開長42~49cm。フクロウ類の中で最小で、長さ約2cmの小さな羽角があるが、倒れて見えないことがある。体は灰褐色で褐色、黒色、灰色などの複雑な虫食い状の斑紋がある。目は黄色。翼の下面は灰白色で、風切羽には黒色の横紋がある。全体が赤褐色の赤色型も少数混ざっている。

◎**近似種との区別** オオコノハズクは少し大きくて目は橙色。後頸に灰白色の斑がある。

分布

ユーラシア大陸の中緯度地帯で繁殖し、冬はユーラシア大陸の低緯度地帯、アフリカ大陸などで越冬する。日本で繁殖した個体は、フィリピンやインドネシアで越冬する。夏鳥として九州から北海道まで広く渡来する。府内では、6~7月に、芦生、久多、八丁平等で確認されている。

◎**府内の分布区域** 全域(局所的)。

生態的特性

北海道では平地や低山帯の森林で、本州ではやや標高の高い針葉樹林などの大木のある深い森の中で繁殖する。夕暮れから夜半にかけて羽音をたてずに飛び回り、オサムシ、ヤガ、バッタなどの昆虫を採食することが多い。繁殖地には4月下旬~5月上旬に渡来して樹洞に営巣するが、青森県ではムクドリ用の巣箱を利用することも知られている。鳴き声は、「ブッポウソウ」と聞きなされ、ブッポウソウの鳴き声と信じられていたこともある。薄暗いこずえ近くで単独で静止することが多いため、見つけるのは難しい。一腹卵数は4~5卵で、抱卵期間は約2週間。雌雄がセミ、トンボ、コオロギなどの昆虫やクモ類を給餌する。越冬地への南下は、北海道では9月中旬、本州では10月である。

生息地の現状

府内では、芦生、久多、八丁平等で確認されているが、極めて少数で、近年繁殖期に観察される場所や確認数が減少している。繁殖期に滞在しているのは、いずれも営巣木となる樹洞のある老大木の生育する広大な自然林である。

生存に対する脅威

老大木のある自然林が、林道建設などの開発によって減少している。また、越冬地における森林伐採などの環境変化も、個体数の減少に影響している可能性が強い。

必要な保全対策

過去に繁殖していたと思われる森を含め、府内でコノハズクが繁殖している可能性がある森林の目録を作成し、個々の森林別に生息状況と保全状況を明らかにした上で、本種の保護を進める必要がある。

文献 日高(監)(1997)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅寸前種
(旧 2002) 絶滅寸前種

ブッポウソウ

ブッポウソウ目ブッポウソウ科
Eurystomus orientalis

環 絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は極めて少なく、近年減少している。

形態

全長 30cm。ハトより少し小さく、翼は長くてしなやか。頭部はすすけた黒、体は青緑色で、翼には白斑があり飛んだときには目立つ。光線の具合によっては瑠璃色に美しく輝く。嘴は赤い。足は赤く短い。

分布

ウスリーから中国東北部、インド東部などで繁殖し、冬期は東南アジアなどに渡る。国内では夏鳥として本州、四国、九州に渡来する。全国的に渡来数が減少している。府内では夏鳥として尾越や芦生などへ渡来して繁殖していた。1980年代に営巣情報が少なくなり、近年の営巣情報はない。

◎**府内の分布区域** 中部地域、南部地域。

生態的特徴

国内では社寺の境内や、農耕地などに隣接したうっそうとした林に生息することが多い。木の枝から飛び立ってオニヤンマなどの大型昆虫を捕らえるほか、林内を飛び回って幹に止まるクワガタムシやカナブンなどの甲虫やセミを捕らえる。甲虫の硬い外骨格を胃ですりつぶすことができるように、貝殻や瀬戸物片、缶ジュースのプルトップなどを雛に与えることがある。大木の樹洞のほか、木製電柱や橋などの穴に営巣することもある。自分で巣穴を掘ることはできず、大型のキツツキの穴をムササビがさらに大きくしたものなどを使っている。渡来当初には数羽が巣穴の奪い合いをすることがある。また、ムササビとも巣穴を巡ってしばしば争いを起こす。5～7月に一腹 3～5 卵の純白の卵を産み、メスが 22～23 日間抱卵する。その後 25～31 日間育雛する。

生息地の現状

府内では、尾越や芦生などの、山間の斜面にあるブナ林などの落葉広葉樹林に渡来し、その近くにある少し開けた場所の木製電柱で営巣している例がほとんどであった。1980年代末に、木製電柱がコンクリート化するに従い営巣数が減少し、現在ではときどき渡来例はあるものの、確実な営巣情報は途絶えている。

生存に対する脅威

直接的には、電柱がコンクリート製に替わるに従って、営巣が見られなくなったが、その背景には営巣木の減少があると思われる。

必要な保全対策

広島県や岡山県、鳥取県では木製電柱の巣の代わりに、電力会社等の協力を得て、電柱のコンクリート化に際して巣箱を設置することにより、ブッポウソウの営巣の継続、拡大に成功している。広島県などのようなブッポウソウ保護に努めている地域と交流をはかるとともに、府内の過去の分布情報や渡来情報を把握して、巣箱設置を含む個体群回復のための事業を起こす必要がある。

文献 日高(監)(1997)、飯田(2001)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★ **新**

京 絶滅危惧種
(旧 2002)リスト外

クロガモ

カモ目カモ科
Melanitta nigra

環 なし

選定理由

クロガモは京都府だけでなく周辺県の海岸域における越冬期の調査でほとんど確認されておらず、越冬個体群の規模が極めて小さいことから絶滅危惧種となった。

形態

全長 48cm。オスの体はすべて黒色だが飛んだ時に次列風切が少し淡く見える。嘴は黒く、上部のふくらんだ部分(鼻こぶ)は橙黄色。メスは頭上から後頸、背、腰、尾が黒褐色。頭と前頸の上部が灰白色。若いオスはメスとオスの中間的な特徴を持ち、鼻こぶは小さく黄色部も小さい。また、体全体に褐色と黒色の羽が混在する。

分布

ユーラシア大陸北部やアラスカで繁殖し、北海道から東北、北陸地方に冬鳥として渡来し、沿岸、沖合、内湾、港などに生息する。内陸ではまれにしか見られない。北海道阿寒湖で夏に幼鳥が観察されたことがあり、繁殖の可能性がある。繁殖地のカムチャツカの分布は様ではない。ある川の下流に普通にいても、付近の川にはまるでいない。京都府北部ではまれな冬鳥として時々観察される。また隣接している兵庫県北部海域でも近年ほとんど観察例はなく、兵庫県南部で少数が確認されているだけの状況である。

生態的特性

淡水の湖沼で繁殖し、貝類やエビなどの水生無脊椎動物、時には魚を食べる。巣は低木の多い草地や、草に覆われた島などにつくる。クリーム色の卵を6~9個産み、27~29日抱卵する。オスは「ピーー」、「フィー」と口笛に似た声、メスは「グルルル」、「クルルル」と低い声で鳴く。

生息地の現状

京都府周辺県が実施してきた1月のガンカモ類でかつてクロガモが多く記録されていたことがあったが、当時は調査が不十分であったようで、現在はそのような記録はなくなっている。

生存に対する脅威

狩猟対象種になっている。

必要な保全対策

狩猟対象種から除くこと。越冬海域の保護。モニタリング継続。

改訂の理由

本来は前回、絶滅危惧種相当であったが、データの見落としにより掲載されなかったため。

文献 日高(監)(1996)、ロブコフ(1988)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会ひょうご(2013)、高野(1982) 執筆 須川恒、中村桂子



鳥類
(絶滅寸前種/絶滅危惧種)

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ヒメクロウミツバメ

ミズナギドリ目ウミツバメ科
Oceanodroma monorhis

環 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 19cm。翼開長 45cm。全身くすんだ黒褐色で白色部はなく、翼の上面には淡色帯がある。翼はやや短く、尾の切れ込みは浅い。

分布

夏鳥として日本近海に渡来し全国の離島で繁殖し、非繁殖期は東南アジアの海域やインド洋で越冬する。舞鶴市沓島で集団営巣している。台風の時などに府内内陸部に落下することがある。

◎府内の分布区域 北部地域の海域。

生態的特性

海面を比較的高く飛ぶ。海の表面に浮上した甲殻類や小さな魚を嘴でつまみ上げて食べる。地面に約0.5mの巣穴を掘ったり岩の隙間を巣場所とする。6月に1卵

産卵し、雌雄で40~50日間抱卵し、8月にふ化する。雛は60~70日で巣立つ。夜になると営巣地へ戻ってきて雛へ給餌する。

生息地の現状

沓島の尾根を中心に集団営巣している。日本国内で最大規模の集団営巣地である(Satou et al. 2010)。

生存に対する脅威

営巣地が府内に1か所しかなく、営巣地への立ち入りやドブネズミなど外来捕食者の侵入、重油運搬タンカー事故などが脅威となる。

必要な保全対策

島への立ち入り規制やドブネズミの侵入予防や発生時の対応が必要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、Satou et al.(2010)、高野(1982)

執筆 須川恒、狩野清貴

★★★ 新

京 絶滅危惧種
(旧 2002) リスト外

コウノトリ

コウノトリ目コウノトリ科

Ciconia boyciana

環 絶滅危惧 IA 類 (CR)

選定理由	兵庫県豊岡市における個体群復元事業により、隣接する京丹後市でも少数個体が周辺生息するようになり 2012年に営巣を開始し、極めて少数の繁殖個体群なので絶滅危惧種となった。
形態	<p>全長 112cm。翼開長 200cm。太くて長い嘴を持った大きな水辺の鳥である。体は白くて風切羽は黒い。内側初列風切の外弁と次列風切の外弁は不規則に銀灰色。目のまわりは赤い。嘴は黒く、足は淡紅色。</p> <p>◎近似種との区別 アオサギは小さくて体や翼が青灰色、足は黄色。首を縮めて飛ぶ。タンチョウは頭部に赤や黒があり、嘴が比較的細くて短く、黄緑色。</p>
分布	<p>分布域は東アジアに限られる。また、総数も推定 2,000～3,000羽と少なく、絶滅の危機にある。中国東北部地域やアムール、ウスリー地方で繁殖し、中国南部で越冬する。渡りの途中で少数が日本を通過することもある。かつて兵庫県や福井県で繁殖していた。1930年代には兵庫県豊岡盆地で約 60羽が生息していたが、個体数が急減し 1971年に野外繁殖個体群はなくなった。2005年にロシア産コウノトリを飼育、繁殖させた個体を 5羽はじめて放鳥し、2010年には 23羽が豊岡盆地に生息するまでになった。その頃より隣接する京都府京丹後市にも周年生息するようになった。</p> <p>◎府内の分布区域 北部、京丹後市。</p>
生態的特性	<p>河川、湿原、水田などの浅い水域や湿地で、ゆっくりと歩きながら魚や両生類などの水生動物を採るが、乾いた草地でバッタを主とする昆虫類やネズミなどの小哺乳類を捕らえることもある。湿地に面した大木の樹上に巣をつくり、2～6個の卵を産む。抱卵期間は 32～35日、育雛期間は 55～70日、1巣から 6羽の雛が巣立つこともある。コミュニケーションの手段としては音声のかわりにビル・クラッタリングを発達させており、求愛の際には頭をそり返してこれを行う。</p>
生息地の現状	<p>兵庫県では、コウノトリの野生復帰事業が本格化し、生息環境の整備(コウノトリの餌が多く発生する生物多様性に配慮した水田耕作、浅瀬などを増やす河川敷整備、越冬期の人工的給餌など)が進んだ 2000年以降、大陸渡来のコウノトリも長期間定着するようになり、放鳥個体が人工巣塔を利用して繁殖に成功するようになった。京都府京丹後市では、電柱に営巣を試みるコウノトリのために、人工巣を複数設置し、京丹後市久美浜町の巣塔での営巣に成功した。2013年にはオス個体が農業用の網にかかって死亡したため 5羽の雛を豊岡市コウノトリ郷公園で一時保護してもらい、その後同町で解放された。</p>
生存に対する脅威	<p>営巣過程においてさまざまな危険がある。越冬期の採食環境の確保も重要である。</p>
必要な保全対策	<p>営巣過程の監視保護活動や採食環境の保全が必要である。</p>
改訂の理由	<p>2004年 10月より中国で営巣した個体(装着足環による)が豊岡市で半年近く滞在していたこともあるが迷行種扱いであった。しかし、定着して繁殖を開始したため。</p>

文献 日高(監)(1996)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会ひょうご(2013)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、狩野清貴

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ヨシゴイ

ペリカン目サギ科
Ixobrychus sinensis

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長 36cm。サギ類の中で最も小さい。オスは頭上黒く、体は黄褐色。飛ぶと風切羽が黒く、雨覆は黄褐色。メスは頭上赤褐色。下面に不明瞭な褐色縦斑がある。幼鳥は下面が白く黒褐色の縦斑がある。

分布

夏鳥として渡来して九州以北で繁殖し、西南日本から東南アジアで越冬する。府内では宇治川や桂川等の河川敷や近くのヨシ原で営巣していたが数は少なく、近年の観察例が減っている。
◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性

5月下旬に繁殖地に渡来し、ヨシ原やヒメガマの群落などの水面上数十 cm の高さに造巣する。一腹卵数は4~7卵。抱

卵期間は17~20日で、雌雄とも抱卵と育雛をする。小魚、カエル、エビなどを採食する。関東の低地では数巣がゆるやかな集団で営巣していることが知られているが、府内では単独営巣が多いと思われる。

生息地の現状

河川敷や休耕田にあった比較的規模の大きいヨシ原で営巣していたが、営巣地となるまとまったヨシ原が少なくなり、ヨシ原が保全されている宇治川向島地区でも観察数が減少している。

生存に対する脅威

営巣地となるまとまったヨシ原が少なくなっている。

必要な保全対策

規模だけでなく、質的にもヨシゴイが営巣可能なヨシ原は何か明らかにして保全する必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982) 執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

クロサギ

ペリカン目サギ科
Egretta sacra

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 63cm。嘴は太くて長く、足は比較的短い中型のサギ。黒色型と白色型があるが、九州から本州に出現するクロサギは黒色型であり、白色型は南西諸島以南に出現する。白色型は珊瑚礁の分布と対応しているといわれる。

分布

国外では、東南アジアからオーストラリアに広く分布する。国内では留鳥として本州以南に分布し、東北地方以北では夏鳥で北海道でも記録がある。府内では日本海沿岸や島に分布している。

◎**府内の分布区域** 北部地域の海岸域や島。

生態的特性

岩礁海岸に生息し、磯の波打ち際で魚を待ち伏せする。繁殖期は5~6月で断崖の岩の隙間に小枝を運び込んで巣をつ

くる。一腹卵数は3~5卵。27日前後抱卵し、ふ化後5~6週間で巣立つ。

生息地の現状

府内では、北部の海岸や若狭湾の島などで繁殖していると思われるが、個体数は極めて少ない。

生存に対する脅威

全国的に釣り人の増加が繁殖に悪影響を与えているとの指摘がある。

必要な保全対策

営巣地となる海岸環境の保全をはかる必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

環 なし

クイナ

ツル目クイナ科
Rallus aquaticus

選定理由 冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少なく、近年減少している。

形態 全長 29cm。頭上から頸、胸側、体の上面はオリーブ褐色で黒い縦斑があり、顔から胸は青灰色、胸と脇には白と黒の横斑がある。上嘴は褐色、下嘴の基部は赤色で目立つ。

◎**近似種との区別** ヒクイナは顔から胸が赤く、足も赤い。

分布 主に東北地方や北海道で繁殖するが、近年関東地方での繁殖も確認されている。冬期は本州中部以南に渡る。府内には冬鳥として少数が渡来する。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

生態的特性 池沼、河川等の湿地に生息する。越冬地では半夜行性で、警戒心が強くて観察しにくい。朝夕には姿を見やすい。雑食

性で昆虫や小魚などの動物質から水草などの植物質まで、様々なものを食べる。ヨシ原や沼沢地、休耕田などに、草の株を折り曲げて巣をつくる。一腹 6~8 卵を産み、雌雄交代で 19~21 日間抱卵する。

生息地の現状 府内には冬鳥として 10 月中旬頃、広沢池、深泥池、桂川、巨椋干拓地等に渡来し、3 月下旬頃渡去する。

生存に対する脅威 越冬数が近年減少しているのは、池岸整備や河川改修でヨシ原などがなくなったり、圃場整備などによる改変のためと思われる。

必要な保全対策 池岸や河川敷などにおいて水辺の植生帯保全が重要である。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

環 準絶滅危惧 (NT)

ヒクイナ

ツル目クイナ科
Porzana fusca

選定理由 夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少している。

形態 全長 23cm。前頭、頬、前頸、上腹は赤茶色で、後頸、背、翼は暗緑褐色。脇、下腹、下尾筒には白と黒の横斑がある。嘴は緑褐色で、足は赤色。

◎**近似種との区別** クイナは顔から胸が灰青色で上面に黒色縦斑があり、嘴が長い。

分布 夏鳥として全国に渡来して繁殖する。本州以南では少数が越冬する。府内でも夏鳥として渡来するが、まれに越冬することもある。

◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性 平地や低山の水田や河川、湿地に生息する。水生昆虫、軟体動物、植物の種子などを食べる。繁殖期は 5~9 月で、イネや

草の中に水草の葉や根などで巣をつくる。一腹卵数は 4~9 卵で、雌雄交代で抱卵し約 20 日でふ化する。繁殖期以外は単独で行動する。「コッコッ」と次第にテンポが速くなる声で鳴く。

生息地の現状 府内では、近年個体数が減少している。岩倉盆地では比較的広がった水田地帯が住宅地と変わって生息地が失われた。

生存に対する脅威 まとまった面積の水田が住宅地等へ変わることに加え、水田の圃場整備などによる環境改変も影響しているものと思われる。

必要な保全対策 圃場整備の手法について見なおす必要がある。

文献 日高(監)(1996)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ヨタカ

ヨタカ目ヨタカ科
Caprimulgus indicus

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少している。

耕地内の残存林などに生息する。夜行性で、主に飛びながら昆虫を捕らえる。6月に地上で産卵する。一腹卵数は2卵で、雌雄交代で抱卵し、約19日間でふ化する。

形態

全長29cm。体は灰白色、褐色、黒、白の複雑な虫食い状の枯葉模様で、肩羽の灰白色が少し目立つ。オスでは目の下、喉、翼の先、外側尾羽の先に白斑があるが、メスでは外側尾羽の白斑はなく、翼や喉の白斑は小さくて不明瞭。

生息地の現状

京都府を含め全国的に渡来数が減少している。京都市市街地周辺でもかつては普通に見られたが、極めて少なくなっている。

分布

夏鳥として九州以北へ渡来する。伊豆諸島や南西諸島では旅鳥。東南アジアに渡って越冬する。府内へも夏鳥として少数が全域に渡来する。
◎府内の分布区域 全域。

生存に対する脅威

地上で営巣するため、ノネコなど地上性の捕食者の増加が影響している可能性がある。また、越冬地である東南アジアにおける広域的森林伐採なども影響しているものと思われる。

生態的特性

4月下旬から渡来し、夜に「キョキョキョキョキョ」と特徴的な鳴き声が聞かれるようになる。疎林、森林内の伐採地、農

必要な保全対策

営巣地情報の収集が必要である。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ヒメアマツバメ

アマツバメ目アマツバメ科
Apus nipalensis

環 なし

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

羽毛をつける。営巣地近くの山の上、川や湖沼の上を飛んで昆虫を採食する。一腹2~4卵を産む。4~12月の繁殖期に2~3回繁殖する。

形態

全長13cm。翼開長28cm。アマツバメ類の中で最小。雌雄同色。尾は浅い凹尾で、拡げると角形になる。体は黒褐色で、喉と腰は白い。

生息地の現状

宇治市のコシアカツバメの集団営巣地で最初に営巣が確認され、京都市でも営巣が確認された。コシアカツバメの集団営巣地で繁殖は継続している模様だが詳細は不明。

分布

東南アジアから日本にかけて分布し、国内では茨城県以西の地域に留鳥として局所的に繁殖している。京都府でも南部地域の特定の場所でのみ繁殖が確認されているが、冬期の観察がないので夏鳥と考えられる。
◎府内の分布区域 南部地域。

生存に対する脅威

コシアカツバメの巣が落とされることが脅威となる。

生態的特性

建物の軒先や橋の下にあるコシアカツバメの集団営巣地で、コシアカツバメの古巣を利用して営巣する。巣の入り口に

必要な保全対策

集団営巣地を早期に発見し保護する必要がある。

文献 日高(監)(1997)、平田(2004)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

シロチドリ

チドリ目チドリ科
Charadrius alexandrinus

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なく、近年減少している。	生息地の現状	1980年代後半には府内で繁殖していなかった。南部地域の河川の広い砂礫地で1991年に繁殖を開始し、1992年には30つがいまで増加したが、その後減少している。木津川ではかつて200羽程度の越冬個体が見られたが、減少している。北部地域では、1997年1月のナホトカ号重油流出事故の際に油に汚染された個体が確認され、6月の調査で久美浜湾の砂浜で4巣が確認され、軽度の汚染個体も確認された。
形態	全長18cm。オスの夏羽では額から眉斑が白く、前頭と過眼線は黒く、頭頂は橙褐色、後頭と体の上面は灰褐色。飛翔時は翼の上面に白帯が出る。冬羽では頭上は灰褐色。	生存に対する脅威	河川敷や砂浜を走り回る四輪駆動車が営巣への大きな脅威となる。
分布	九州以北で繁殖し、冬は本州以南で越冬する。府内では南部地域や北部地域の海岸域で少数が繁殖し越冬する。 ◎ 府内の分布区域 北部地域、南部地域。	必要な保全対策	河川敷や砂浜への、車の立ち入りの規制が必要である。
生態的特性	干潟、海岸、水田、河川敷に生息し、水生昆虫やミミズなどの小動物を採食する。繁殖期は4～7月で、裸地に1巣2～3卵を産む。約3週間でふ化する。繁殖終了後、暖地へ移動する。		

文献 日高(監)(1996)、京都府(1998)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982) 執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ヤマシギ

チドリ目シギ科
Scolopax rusticola

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	小動物を採食する。一夫一妻のつがい関係を持ち、地上に一腹約4卵を産み、メスが抱卵する。21～24日でふ化し、15～20日後に巣立つ。
形態	全長34cm。大きくてよく太ったシギ。後頭には黒い横斑があり、体の上面や雨覆は赤褐色、黒、灰白色の複雑な斑紋で、背と肩羽の外側は灰白色の縦線となって見える。尾は黒くて先が灰色。	生存に対する脅威	府内で観察されるのは10月下旬から翌年の4月中旬まで。主に夕方から活動し、家畜の糞捨て場や落ち葉の豊富な林または林縁部などで見かける。京都府立植物園では例年1～2羽の越冬が観察されるほか、時には身近な場所にも生息している。
分布	ユーラシア大陸の温帯域に広く分布。北海道では夏鳥、本州中部以北では留鳥、本州中部以南では冬鳥。府内でも少数が越冬する。 ◎ 府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	個体数が少ないのに狩猟鳥になっている。個体数の少ない府県では京都府のように狩猟対象種からはずすべきであろう。
生態的特性	森林のやや湿った場所を好む。繁殖期には昼間に、非繁殖期には主に夜に活動する。昆虫、クモ類、ミミズなど地上性の		

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982) 執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

アオシギ

チドリ目シギ科
Gallinago solitaria

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 30cm。ジシギ類の中で最も大きい。全体の斑紋はほかのジシギ類と似ているが、頭部や体の上面の縦線は黄白色でなく、青灰色味を帯びた白色である。背や翼はオリーブ褐色を帯びている。次列風切の先は白くなく、下雨覆には一面に斑紋がある。

◎**近似種との区別** タシギは山間部でも溪流に居ることはまずない。体も小さい。

分布

チベット高原からモンゴル、ウスリー地方の高山帯で繁殖し、日本には冬鳥として渡来する。府内では極めて少数が中部地域、南部地域で越冬している。

◎**府内の分布区域** 中部地域、南部地域。

生態的特性

繁殖期にはオオジシギと同様にすさまじい羽音をたててディスプレイ飛翔をする。冬期は山地の湿地や溪流沿いに生息する。昆虫や巻き貝を採食する。営巣地は山地の溪流近くの草原で、一腹 4卵を産む。

生息地の現状

府内では、中部地域の山間湿地や南部地域の砂地のある細い谷川で越冬していることが確認されている。

生存に対する脅威

山間の道路建設などに伴う山間溪流の改変などが影響すると思われる。

必要な保全対策

規模の小さい河川の改変であっても、影響がでないような配慮が必要である。



鳥類
(絶滅危惧種)

文献 日高(監)(1996)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、梶田学

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ハリオシギ

チドリ目シギ科
Gallinago stenura

環 なし

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 25cm。姿、形はチュウジシギと酷似する。尾が短いめ寸詰まりに見える。翼から尾の突出はジシギ類の中で最も少ない。尾羽は 22~28枚(通常 26枚)。外側尾羽 6~8対は短く、幅は 1~2mmでほとんど羽軸だけの針状羽であり、野外で見えることもある。

◎**近似種との区別** オオジシギとチュウジシギは大きくて尾が長い。

分布

ユーラシア大陸の北部で繁殖し、中国南部、フィリピンなどで越冬する。国内では旅鳥として全国に渡来する。府内では

極めて少数が春秋の渡りの時期に確認される。

◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性

水田、蓮田、川や沼の岸辺に生息し、主に小型無脊椎動物を採食する。繁殖環境は森林内の湿地で、一腹 3~4卵である。

生息地の現状

府内では極めて少数が毎年通過しているものと思われるが、確認されるのはほとんど落鳥や保護された場合である。

必要な保全対策

渡来情報を継続的に蓄積することが課題である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

オグロシギ

チドリ目シギ科
Limosa limosa

環 なし

選定理由	春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	殖地では湖沼や川の周辺の荒野、牧草地などの地上にくぼみをつくって皿形の巣をつくる。一腹3~4卵を産み、雌雄が抱卵や世話をする。
形態	全長39cm。オスの夏羽では頭部から胸は赤褐色。上尾筒と尾は白くて尾の先は黒い。飛翔時には黒い風切羽に幅の広い白帯が出る。嘴は真っ直ぐで先は黒く基部は淡紅色。足は黒い。	生存に対する脅威	府内では春より秋に多く、刈り取りの終わった田や休耕田、河川敷内の草地などで数羽の小群が観察される。
分布	ユーラシア大陸の中緯度北部で繁殖し、冬はオーストラリアや東南アジアへ渡る。国内では旅鳥として全国に渡来する。府内では極めて少数が巨椋干拓地などに渡来する。 ◎府内の分布区域 南部地域。	必要な保全対策	河川改修、水田の圃場整備などによる湿地の破壊が進むと、個体数が減少するおそれがある。
生態的特性	渡りの時期に海岸や湖岸の干潟、河口、ため池などの砂泥地に現れ、泥の中のミミズなど小型無脊椎動物を採食する。繁		河川敷や水田の湿地環境保全の観点からの施策が重要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

オオソリハシシギ

チドリ目シギ科
Limosa lapponica

環 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由	春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	渡りの時期に海岸や湖岸の干潟、河口の砂泥地に現れ、泥の中の軟体動物、甲殻類などを採食する。繁殖期は6~7月で、地衣やコケで地上に巣をつくり、一腹3~5卵を産む。抱卵期間は20~21日。
形態	全長41cm。長い嘴が少し上に反り、足は比較的短い大型のシギ。夏羽では顔、頸、胸、腹は赤褐色。腰は白地にわずかに黒い横斑があり、飛翔時に白っぽく見える。	生息地の現状	府内では秋より春に多く、あまり内陸部には入らず、海岸や干潟で見ることが多い。久美浜湾周辺の代かき中の水田や阿蘇海の浅瀬などで確認されている。
分布	ユーラシア大陸極北部などで繁殖し、冬はオーストラリアや東南アジアへ渡る。国内では旅鳥として全国に渡来する。府内においても久美浜湾、阿蘇海などに春秋に渡来するが極めて少ない。 ◎府内の分布区域 北部地域、南部地域。	必要な保全対策	海岸の干潟、海岸周辺農耕地の湿地環境の保全。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ホウロクシギ

チドリ目シギ科

Numenius madagascariensis

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

原、泥炭草原などで、2~3つがいの小さなコロニーをつくって繁殖する。一腹4卵を産む。上空旋回のディスプレイ飛行が知られている。

形態

全長62cm。形も大きさもダイシャクシギと変わらない。下背、腰、上尾筒は褐色地に黒色の斑があり、飛行時も他の背面の色と同じ色である。翼の下面には一様に黒色横斑があり、白っぽくは見えない。

生息地の現状

府内では中下流の河川敷、若狭湾岸の浅瀬、内陸の草原や耕作地、代かき中の水田に極めて少数が渡来する。

分布

繁殖地はウスリー地方とカムチャツカ半島に限られ、フィリピンやオーストラリアで越冬する。旅鳥として日本全国へ渡来する。府内でも渡り期に阿蘇海や木津川などへ渡来するが、秋の観察例は少ない。

生存に対する脅威

河川改修や圃場整備などによって、餌環境などが貧弱になっていると考えられる。

必要な保全対策

特に生物多様性に配慮した水田経営が大切である。

◎府内の分布区域 北部地域、南部地域。

生態的特性

嘴を泥の中へ差し込んで探るようにして、環形動物、軟体動物、甲殻類、昆虫など小型無脊椎動物を採食する。湿地草

文献 日高(監)(1996)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ツルシギ

チドリ目シギ科

Tringa erythropus

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

生態的特性

水田や沼など内陸の湿地を好み、昆虫やミミズ、小魚、カエル、カニなどを採食する。巣はツンドラの湿原に枯れ草を集めて作り、一腹4卵を産む。

形態

全長33cm。嘴は細くて長く、足も長い。夏羽では全体がすすけた黒色で、目の縁は白く、体の上面の羽毛には白い羽縁と斑点がある。飛行時には背の中央と腰が白い。冬羽では頭上は灰色で黒い縦斑があり、体の上面も灰色である。

生息地の現状

府内では3月中旬~4月上旬頃に最も多く、秋には9~10月に現れるが少ない。泥質の多い河川の中流域、代かき中や田植え直後の水田、休耕田、浅い水辺、草地などで1~数羽が観察される。

分布

ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬は東南アジアやアフリカ大陸に渡る。旅鳥として日本全国に渡来する。日本へ渡来する時期は早く、2月には第1陣が見られ、地方によって春を告げる鳥となっている。府内においては、巨椋干拓地などで観察され、国内の他の地域と同じく春の観察例が多い。

生存に対する脅威

圃場整備などによる餌動物の減少が生息数に影響する可能性がある。

必要な保全対策

生物多様性の配慮した水田経営が大切である。

◎府内の分布区域 南部地域。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

コアオアシシギ

チドリ目シギ科
Tringa stagnatilis

環 なし

選定理由 春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態 全長 25cm。嘴は細くて、足は非常に長い。顔から胸は白地に黒褐色の斑点が縦に並び、腹は白い。下背から上尾筒は白い。翼の下面は風切羽が黒くて下雨覆は白く見える。足はオリーブ緑色。

分布 中央アジアなどで繁殖し、冬はオーストラリアやインドなどへ渡る。旅鳥として日本全国に渡来し、国内で越冬する個体もいる。府内では春より秋の方が多く、滞在する個体数は極めて少ない。
◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性 干潟に出ることは少なく、内陸部の水田や河川などの湿地に出現することが多い。水面近くの小型の昆虫やエビなどを

採食する。湖沼や湿地の周辺で枯れ草を集めて巣をつくる。小さな集団営巣地をつくる。

生息地の現状 府内では8月中旬～9月上旬頃にアオアシシギの群れに混ざっていたり、単独または2～3羽で観察される。極めて少ないが、巨椋干拓地では近年毎年観察される。河口や中下流域の河川の岸辺、耕作中の畑地や代かき中の水田に出現する。

生存に対する脅威 河川改修、水田の圃場整備、道路建設などによる農耕地の分断化などが、生息数に影響する可能性がある。

必要な保全対策 生息環境のモニタリングを進め保全課題を明らかにする必要がある。

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ソリハシシギ

チドリ目シギ科
Xenus cinereus

環 なし

選定理由 春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態 全長 23cm。上に反った長めの嘴と短い足を持ったシギ。夏羽では頭上から体の上面は褐色味のある灰色で、肩羽の黒い軸斑はつながって黒線状になる。

分布 ユーラシア大陸の高緯度のタイガ地帯の湿地で繁殖し、冬はオーストラリアや東南アジアへ渡る。国内へは旅鳥として全国に多数渡来する。府内の湿地で春秋の渡り期に観察されるが渡来数は少ない。
◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性 渡りの時期に干潟、河口、海岸、河川、水田などに出現するが、内陸の湿地にはあまり入らない。昆虫や甲殻類を採食す

る。水辺近くの地上を浅く掘って草を集めて、一腹3～5卵を産む。

生息地の現状 府内では春秋の渡りの時期に極めて少数が、河口や中下流域の河川の岸辺、耕作中の畑地や代かき中の水田に出現する。最も干潟を好むシギであり、府内には干潟が少ないためか渡来数は少ない。

生存に対する脅威 河川改修、水田の圃場整備などによる湿地の破壊が進むと、個体数が減少するおそれがある。

必要な保全対策 生息環境のモニタリングを進め保全課題を明らかにする必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

トウネン

チドリ目シギ科
Calidris Ruficollis

環 なし

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長 15cm。比較的嘴の太い小型のシギ。夏羽では顔から頸は赤褐色。頭上から体の上面は赤褐色で黒い軸斑と白い羽縁が出る。飛翔時には翼に細い白帯が出る。冬が上面が褐色で黒い軸斑があり、胸側に褐色斑。幼鳥は冬羽に似る。嘴と足は黒い。

分布

ユーラシア大陸とアラスカ北部で繁殖し、東南アジアやオセアニアの海岸部で越冬する。旅鳥として日本全国へ渡来し、九州南部で少数が越冬する。府内では旅鳥として少数が渡来する。

◎府内の分布区域 南部地域。

生態的特性

渡りの時期には干潟や、砂浜、内陸の湿地などに大群で渡来することがある。ゴカイや甲殻類を採食する。ツンドラの草地や苔地に皿形の巣をつくり、一腹4卵を産む。「チュル、チュル」と鳴く。

生息地の現状

府内では泥質の多い中流域の河川敷、代かき中の水田、休耕田などに出現するが、近年減少している。

生存に対する脅威

水田の圃場整備などによる餌の減少や、国内の干潟減少の影響などが府内の渡来数の減少に関係しているものと思われる。

必要な保全対策

生息環境のモニタリングを進め保全課題を明らかにする必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

オジロトウネン

チドリ目シギ科
Calidris temminckii

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 15cm。夏羽では頭上から体の上面は黒い軸斑と黄褐色の羽縁が明瞭、胸は黄褐色に黒い縦斑があり、腹は白い。飛翔時には翼に白帯が出て尾羽の外側は白い。嘴は黒く、足は黄緑色。

◎近似種との区別 トウネンの足は黒色。

分布

ユーラシア大陸北部で繁殖し、インドや東南アジアで越冬する。国内では旅鳥として九州以北に少数が渡来し、越冬する個体もいる。府内では春秋の渡り期に少数が、冬期に極めて少数が確認されている。

◎府内の分布区域 南部地域。

生態的特性

水田や干拓地、河川の河口部などに出現する。繁殖期には昆虫、非繁殖期には甲殻類やゴカイなどの小動物などを採食

する。巣はヤナギなどの根元につくり、一腹4卵を産む。一腹目はオスが、二腹を産む場合はメスが抱卵する。

生息地の現状

府内では春秋の渡り期に、泥質の多い中流域の河川、代かき中の水田や休耕田に少数が出現し、冬期には極めて少数が水を抜いたため池などで越冬する。

生存に対する脅威

よい越冬地となるかどうかはため池の管理法によることが大きい。

必要な保全対策

越冬しやすいため池の管理が重要である。

文献 日高(監)(1996)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ヒバリシギ

チドリ目シギ科
Calidris subminuta

環 なし

選定理由 春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なく、近年減少している。

形態 全長 15cm。夏羽で頭上から体の上面は茶褐色で黒い軸斑があり、背に V 字形の白線が見える。嘴は細くて黒く、足は黄緑色。飛翔中は翼に細い白線が出る。冬羽では茶褐色味が少なくなる。

◎**近似種との区別** トウネンは足が黒色。

分布 シベリア東部で繁殖し、東南アジアで越冬し、一部はオーストラリアへも渡る。旅鳥として日本全国へ渡来する。沖縄では越冬する。府内では春秋の渡り期に少数が滞在する。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

生態的特性 渡りの時期には、やや内陸の淡水湿地や水田に多く滞在する。昆虫、甲殻類、貝を採食する。山地のツンドラや低地の湿原・草地で6月上旬から造巣し、一腹4卵を産む。

生息地の現状 府内では春より秋の観察例が多く、巨椋干拓地では少数ながら毎年観察されている。泥質の多い河川の中流域、代かき中や田植え直後の水田、休耕田に出現する。時にはトウネンの群れに混ざっている。

生存に対する脅威 水田の圃場整備などによる餌の減少や、国内の干潟減少の影響などが、府内の渡来数の減少に関係しているものと思われる。

必要な保全対策 生息環境のモニタリングを進め保全課題を明らかにする必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

タマシギ

チドリ目タマシギ科
Rostratula benghalensis

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由 留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なく、近年減少している。

形態 全長 24cm。メスはオスより美しい。雌雄とも目の周囲の白、胸側の白線とそれに続く背の外側の黄色い線が目立つ。オスは頭から背にかけて全体に褐色だが、メスは背から側面は緑がかったブロンズ色、喉から胸は栗色をしている。幼鳥はオスに似て地味な色をしている。

分布 留鳥として北陸から関東地方以南で繁殖する。冬期はより南へ渡るものもいる。府内では周年生息しているが、個体数は少ない。特に府内の厳冬期の記録は極めてまれである。

生態的特性 沼、池のほとり、湿田などに生息する。昆虫やミミズ、植物の種子を採食する。繁殖期は2~10月と長い、ピークは6~

7月。一腹卵数は普通4卵。オスが16~19日間抱卵し、ふ化後の雛の世話をする。

生息地の現状 生産調整のために休耕田が増加した時期に一時的に個体数が増加したようだが、大型機械導入のために耕地整理、乾田化が進み、生息環境が悪化している。水田の宅地化に伴い見られなくなった例もある。

生存に対する脅威 水田の宅地化や乾田化。

必要な保全対策 湿田の自然環境保持に果たす役割を評価して、農業経営のありかたを見直すべき時期にきている。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、脇坂英弥

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ツバメチドリ

チドリ目ツバメチドリ科
Glareola meldivarum

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長 27cm。ツバメを大きくしたような形。夏羽では、喉は黄白色で黒い線で囲まれる。飛翔中は翼の下面が赤栗色で、風切羽は黒っぽい。上尾筒は白く、尾は黒い。冬羽では、喉は淡褐色で周囲の黒線は切れて不明瞭になる。

分布

ユーラシア大陸東南部に分布し、国内では旅鳥または夏鳥として渡来する。関東、東海、近畿などで局地的に繁殖する。府内の南部地域、特に巨椋干拓地に春秋に渡来する。

◎府内の分布区域 南部地域。

生態的特性

地上で昆虫等を捕らえることもあるが、素速く飛び回って空中で昆虫を捕らえることが多い。営巣地として草がほとん

ど生えていない広大な荒地状の場所を好むため、埋め立て直後の造成地や干拓地で一時的に繁殖する例が多い。小石を敷き詰めた簡単な巣に一腹 2~4 卵を産み、雌雄で抱卵、育雛する。冬期は東南アジアなどへ渡る。

生息地の現状

巨椋干拓地では 4月下旬~5月上旬、及び 8月中旬~9月下旬の春秋に、数羽~20羽程度の小群が観察されていたが、近年減少傾向にある。秋期はほとんど幼鳥であった。

生存に対する脅威

繁殖を開始した場合は、営巣地の攪乱が脅威となる。

必要な保全対策

繁殖を開始した場合は営巣地の嚴重な保護が必要。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

鳥類
(絶滅危惧種)

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

コアジサシ

チドリ目カモメ科
Sterna albifrons

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 28cm。小型のアジサシ。夏羽では額が白く、頭上から後頭にかけて黒い。冬羽では額と頭頂が白く、後頭は黒い。

分布

ユーラシア大陸から北アメリカ大陸の中緯度地帯で繁殖し、オーストラリア、アフリカ大陸、南アメリカ大陸で越冬する。国内では夏鳥として本州以南に渡来し繁殖する。府内へも夏鳥として渡来する。府北部地域からの記録は少ない。

◎府内の分布区域 北部地域、南部地域。

生態的特性

海岸、河川、湖沼に生息。上空から水中に飛び込んで小魚を採食する。5月頃に地面に浅いくぼみをつくり、一腹 2~3 卵を産み、雌雄が交代で抱卵する。

生息地の現状

府内では 4月下旬頃、主に淀川水系の河川に姿を見せ、河川敷や造成地の砂礫地で営巣するが、繁殖個体数は極めて少なく不安定であり近年繁殖記録がない。川から離れたため池でも、小魚を採食するのが時々観察される。

生存に対する脅威

営巣地となる造成地や河川敷での人による影響が大きい。

必要な保全対策

毎年の営巣地を把握できるシステムを構築し、営巣地に人が立ち入らないような管理が必要である。特に河川敷へのオフロード車の乗り入れを嚴重に規制する必要がある。デコイや音声をつかったコロニーの誘導も有効かもしれない。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ミサゴ

タカ目ミサゴ科
Pandion haliaetus

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由 留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態 全長オス 54cm、メス 64cm。翼開長 155～175cm。翼は細長くて尾は短い。頭部は白くて過眼線が黒く、体の上面は黒褐色。体の下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。翼の下面には白色が多い。

分布 北半球全体に広く分布し、国内では主に北日本で繁殖するが、近畿地方でも少数が繁殖する。海岸部に多いが、冬期、内陸部の河川や湖沼にも広く出現する。府内では北部地域の一部で繁殖し、冬期は各地の河川に飛来する。

◎**府内の分布区域** 全域(繁殖期は北部地域の一部)。

生態的特性 停空飛行した後、飛び込んで魚をとらえる。主食はスズキ、コイ、マス、フナ、ナマズなどの魚。海岸の孤立した岩の上や

樹上で営巣する。産卵期は3月下旬頃で、産卵数は1～4個。抱卵日数は約37日。育雛期間は50～60日で、平均は53日。繁殖開始年齢は3才くらいといわれている。

生息地の現状 府北部地域の海岸域の比較的集落に近い山林内で、複数の営巣確認が続いている。冬期は淀川水系や由良川水系などの河川や湖沼等に出現する。

生存に対する脅威 海岸域で営巣する場合に、釣り人のために親が巣に近づけず、カラスに雛をとられるおそれが生じている。

必要な保全対策 巣場所によっては立ち入り禁止等の対策が必要となる。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、増田(1998、1999ab)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ハチクマ

タカ目タカ科
Pernis apivorus

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由 夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少している。

形態 全長オス 57cm、メス 61cm。翼開長 121～135cm。トビより同大かやや小さい。飛行時翼が幅広く、頭頸部が突出して見える。上面は暗褐色であるが、下面は淡色から暗色まで個体差が大きい。

分布 本州以北の低山帯に夏鳥として渡来し、繁殖するが、本州中部以北の方が個体数が多い。府内では少数が山間部で繁殖するほか、秋の渡りの時期に多数が通過する。
◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性 南方で越冬し、日本へは3月から渡来しはじめるが、渡来数が増加するのは4～5月にかけてである。地中のクロスズメ

バチの巣を掘り起こして捕食するほか、他のハチの巣やカエルなどを捕食することも多い。巣は森林内のアカマツ、カラマツ、モミなどの高木につくられる。一腹2～3卵を産み、雌雄で約30～35日抱卵し、雛はふ化後35～45日後に巣立つ。巣立ち後2週間ほどは親から給餌を受け、8月頃に独立する。

生息地の現状 府内では、丘陵地から低山帯の主としてアカマツのある森林で繁殖している。

必要な保全対策 餌となるハチやカエルなどが豊富な、丘陵地から低山帯にかけての谷間にある水田と、営巣地からなる森林とがセットになっている環境の保全が重要と思われる。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

オジロワシ

タカ目タカ科

Haliaeetus albicilla

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長オス 80cm、メス 95cm。翼開長 180～230cm。翼は幅が広くて四角い。尾は短くて少しくさび形。体全体は褐色であるが頭部は淡色の個体が多い。尾は白色。嘴と足も黄色。

◎**近似種との区別** 飛翔中オオワシの尾は長いくさび形。

分布

ユーラシア大陸北部で繁殖し、日本でも北海道北部、東部で繁殖する。冬鳥として主に北日本に渡来する。府内では日本海沿岸で時々観察される。

◎**府内の分布区域** 北部地域の海岸域。

生態的特性

日本へは10月に渡来し、北海道で繁殖する一部を残し3月には繁殖地へ去る。魚類を主食とするが、鳥類やウサギ、ヘビも捕食し、屍肉も食べる。北海道では大径木の樹上に営巣し、一腹卵数は1～3卵。雌雄で約1か月間抱卵し、ふ化後2か月ほどで巣立つ。

生息地の現状

府内では、日本海沿岸のカモ類の渡来地となっている久美浜湾や阿蘇海などへ渡来する。

生存に対する脅威

久美浜湾ではサーファーや水上バイクが、阿蘇海では野田川河口周辺の改修工事などが、餌となるカモ類を減少させているとの指摘がある。

必要な保全対策

鳥獣保護区として監視を強める必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982) 執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

チュウヒ

タカ目タカ科

Circus spilonotus

環 絶滅危惧ⅠB類 (EN)

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長オス 48cm、メス 58cm。翼開長 113～137cm。雌雄とも色彩による変異が大きい。オスは頭部が灰色で淡褐色の縦斑のあるものと、黒色縦斑が密にあり黒く見えるものがある。メスは全体に褐色で、腰の部分に目立つ斑紋があるものとなないものがある。

◎**近似種との区別** ハイロチュウヒのメスや幼鳥には翼や尾に明瞭な黒色横斑がある。

分布

北海道と本州中部以北で少数が繁殖するほか、冬期にはシベリア、極東から多数が渡来する。府内では冬鳥として少数が渡来する。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

生態的特性

繁殖環境は広いヨシ原が多く、非繁殖期はヨシ原および周辺の農耕地などを主な採食地とする。野ネズミやカエルを捕食する。ヨシ原内の地上に巣をつくり、一腹5～6卵を産み、31～38日間抱卵する。ふ化後5週間で巣立つ。冬期は群れで就暁する習性がある。

生息地の現状

巨椋干拓地や宇治川や木津川などで少数が越冬する。ハイロチュウヒより湿ったヨシ原を中心に出現する。

生存に対する脅威

巨椋干拓地は、圃場整備や道路建設等により環境が大きく変わろうとしている。

必要な保全対策

巨椋干拓地や、宇治川などの河川敷といった主要な越冬地の保全の必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982) 執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ハイロチュウヒ

タカ目タカ科
Circus cyaneus

環 なし

選定理由 冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

生態的特性 冬期にはチュウヒよりやや乾燥した草原や湿地に生息し、野ネズミや小鳥、カエルなどを捕食する。草やヨシの上を低く飛ぶことが多い。

形態 全長オス 43cm、メス 53cm。翼開長 99～124cm。オスは頭部と体と尾が明るい灰色で、胸と腹は白く、上尾筒も白い。飛翔中、初列風切 6枚は黒い。メスや幼鳥では頭部や体の下面は淡褐色の地に黒褐色の縦斑がある。

生息地の現状 巨椋干拓地や木津川、宇治川などで極めて少数が越冬する。

◎**近似種との区別** チュウヒのオスは頭部や背に褐色や黒色の斑がある。メスや幼鳥は褐色味が強く、翼の下面に横斑はない。

生存に対する脅威 巨椋干拓地では、圃場整備や道路建設等により環境が大きく変わろうとしている。

分布 ユーラシア大陸と北アメリカ大陸北部で繁殖し、ほぼ日本全国に冬鳥として渡来する。府内では極めて少数が越冬する。

必要な保全対策 巨椋干拓地や木津川などの河川敷といった主要な越冬地の保全が必要である。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ツミ

タカ目タカ科
Accipiter gularis

環 なし

選定理由 留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

下旬～5月上旬で、針葉樹のほか、カシやコナラなどの広葉樹の地上 15m前後の高い位置に営巣する。

形態 全長オス 27cm、メス 30cm。翼開長 51～63cm。オスの上面は暗青灰色。下面は白くて胸側から脇は黄赤褐色で、目は暗紅色。メスの上面は暗石板色、下面の横斑は太くて粗い。

生息地の現状 府内では芦生などで局所的に繁殖が確認されているが、繁殖地の分布の詳細は不明である。秋の渡り期にはよく観察され、冬期には山麓や市街地にも現れる。

◎**近似種との区別** ハイタカは上面の色彩が淡い。眉斑は明瞭で、メスの下面の横斑は細かい。

生存に対する脅威 丘陵地から山間部の開発や大規模な森林伐採の影響が懸念される。

分布 夏鳥または留鳥として九州以北に分布する。府内では局所的に繁殖が確認されており、非繁殖期には広く観察される。

必要な保全対策 府内の繁殖環境の情報を詳細に把握する必要がある。

◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性 平地から山地の林に生息し、小鳥や昆虫を捕食する。関東地方では近年、都市における繁殖例が増えている。産卵は4月

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、二村(1990)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

オオタカ

タカ目タカ科
Accipiter gentilis

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長オス 50cm、メス 57cm。翼開長 105～130cm。上面は暗青灰色で、頬は青黒色で白い眉斑は明瞭。下面は白地に黒くて細かい横斑が一面にある。幼鳥は上面褐色で下面には褐色の縦斑。

分布

全国的に繁殖し、越冬する。北方で繁殖した個体は冬期に南へ渡る。府内では局所的に繁殖が確認され、冬期には全域で確認される。

◎府内の分布区域 全域(繁殖は局地的)。

生態的特性

近年西日本において繁殖地を拡大しつつある。繁殖期にはアカマツ林を営巣地とすることが多く、非繁殖期には、河川

敷や都市の緑地などに広く出現する。小中型の哺乳類や鳥類を捕食する。雌雄で広い縄張りを持ち、太いアカマツなどの枝上に、枝を積み重ねて巣をつくる。一腹 3～4 卵を産み、主にメスが 35～38 日間抱卵し、ふ化後 35～42 日で巣立つ。

生息地の現状

府南部地域の繁殖地では、コナラを主としアカマツが混ざる約 5km²の孤立林で 1 つがいがい、尾根に囲まれた胸高直径約 70cm の同じアカマツの木に 2 シーズン続けて営巣した。繁殖期の行動圏は 5～10km²。

生存に対する脅威

住宅地開発などにもなう営巣地の破壊。

必要な保全対策

孤立林と、狩り場に適当な農耕地に続く林縁部がセットになっている点が重要と考えられる。

文献 遠藤(1989)、江崎ほか(2000)、日高(監)(1996)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

サシバ

タカ目タカ科
Butastur indicus

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長 49cm。翼開長 103～115cm。およそハシボソガラス大。体の上面は褐色。白い眉斑があり、喉は白くて中央に黒い縦線がある。下面は白くて胸と腹には褐色横斑があり、胸では密。

◎近似種との区別 ハチクマは大きくて、翼の前縁から出ている頭部が長い。

分布

夏鳥として本州、四国、九州に渡来する。府内では繁殖期に一部地域の山林で観察され、少数が繁殖している。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

丘陵地や低山帯の谷沿いに夏鳥として渡来する。林縁部、水田畔、湿地、草地などで、ヘビ、トカゲ、カエル、ネズミ、

昆虫などを捕食する。主にアカマツ、スギなどの針葉樹に営巣する。産卵は 4 月下旬～5 月上旬で、産卵数は 2～4 個。抱卵期間は約 30 日で、ふ化後 36 日前後で巣立つ。

生息地の現状

京都市周辺にあるアカマツ林などでも営巣が確認されており、府内では全域で少数が繁殖していると思われる。比較的 low 山にある山林と、採食地として重要と考えられる農地や湿地のセットが、繁殖環境として重要と考えられている。

生存に対する脅威

様々な開発により繁殖地に適した環境が消滅し、餌となる中小動物が減少している。

必要な保全対策

府内の繁殖環境の情報を詳細に把握する必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆者 須川恒、梶田学

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

クマタカ

タカ目タカ科
Spizaetus nipalensis

環 絶滅危惧 I B 類 (EN)

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なく、近年減少している。	生息地の現状	北山の比較的険しい地域で、少数が繁殖している。個体数が減少傾向にある上に、繁殖成功率が低下しており、将来激減するおそれがある。
形態	全長オス 72cm、メス 80cm。翼開長 140～165cm。翼の幅は広くて先端は指状に開き、後縁には膨らみがある。尾は長めで幅が広い。後頭の羽毛は少し長くて冠羽状になる。	生存に対する脅威	広域林道建設とその後の支道建設に伴う森林伐採などが影響している可能性がある。
分布	東南アジアの森林地帯を主な生息地とし、日本は分布の北限に近い。国内の山岳部の森林帯に生息し、府内の森林にも少数が生息する。 ◎ 府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	府内の繁殖環境の情報を詳細に把握する必要がある。
生態的特性	比較的険しい山地に生息し、森林内の急斜面にある大きな樹木に営巣する。森の中に住む様々な中小型の動物を獲物として、森林内のけもの道や林縁で狩りを行う。主な餌はノウサギ、ヤマドリ、ヘビなどである。1月になるとディスプレイ行動と並行して巣づくりが開始される。産卵期は3～4月。一腹卵数は1卵。主にメスが約1か月半抱卵し、7～8月頃に巣立つ。巣立ち後の幼鳥は遠方まで行動圏を広げず、翌年の春でも巣から半径1km以内に滞在している。		

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

オオコノハズク

フクロウ目フクロウ科
Otus semitorques

環 なし

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	府内の山地で少数が繁殖しているものと思われるが、営巣状況は十分把握されていない。
形態	全長 23～26cm。翼開長 54～60cm。雌雄とも赤褐色を帯びた暗褐色で、灰白色と黒色の複雑で細かい虫食い斑があり、後頸には灰白色の斑がある。長さ 34mm ほどの羽角がある。目は橙色。	生存に対する脅威	樹洞を持つ大木がある規模の大きい森林が、広域林道建設などによって減少していることが脅威となっていると思われる。
分布	東アジアの一部、東南アジアの森林で繁殖する。北海道では夏鳥で、本州以南では留鳥として分布するが、北方の個体は冬に南へ渡る。府内では、極めて少数が山地で繁殖している。 ◎ 府内の分布区域 南部地域。	必要な保全対策	営巣している森林の目録を作成し、保全策を検討する必要がある。また、巣箱の設置が保護増殖に有効と考えられており、巣箱架設とその後のモニタリングの検討も必要であろう。
生態的特性	食物は、ネズミやヒミズなどの小型哺乳類、トカゲや小鳥である。秋冬には木の茂みや竹林の中に数羽が集まることがあり、下には多くのペリットが落ちている。4～7月に森林の大木の樹洞で営巣する。一腹卵数は4～9卵。雛はふ化後約1か月で巣立つ。		

文献 日高(監)(1997)、飯田(2001)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

トラフズク

フクロウ目フクロウ科

Asio otus

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 35~40cm。翼開長 91~102cm。中型のフクロウで耳羽は長い。体の上面は灰色で黒、褐色、白の複雑な斑紋がある。目は橙色。

◎**近似種との区別** コミミズクは耳羽がほとんどなく、目は黄色で目の周囲は黒い。

分布

ユーラシア大陸や北アメリカ大陸の中緯度地帯で広く繁殖し、冬期は低緯度地帯へ渡る。国内では留鳥として本州中部以北で局地的に繁殖し、本州中部以南では冬鳥として渡来する。府内では南部地域で極めて少数が越冬する。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

生態的特性

繁殖期は低山帯、越冬期は主にスギ、ヒノキなどの針葉樹林に生息する。夕方から夜にかけて活動し、主としてネズミやモグラを捕食し、小鳥や昆虫も食べる。

巣は樹洞やタカのご巣を利用し、5月中下旬に一腹4~6卵を産む。「ウー、ウー」と繰り返して鳴く。越冬中は数羽~数十羽が一緒にいることもある。

生息地の現状

府内では比較的大きな河川近くにある森の林縁などで、極めて少数が冬期に確認されている。

生存に対する脅威

越冬地として利用する樹木の伐採など。

必要な保全対策

越冬期の生息情報を集積して、生息環境の特性を把握することが必要である。

文献 日高(監)(1997)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

コミミズク

フクロウ目フクロウ科

Asio flammeus

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長 35~41cm。翼開長 94~104cm。耳羽は短くてほとんど見えない。顔盤は淡灰褐色で目は黄色。目の周囲は黒い。体の下面は縦斑だけで、交わる横斑はない。

◎**近似種との区別** トラフズクは耳羽が長い。

分布

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の高緯度地帯に広く繁殖し、冬期は低緯度地帯へ渡る。日本全国に冬鳥として渡来する。府内では巨椋干拓地など南部地域で越冬しており、北部地域からの報告もある。

◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性

繁殖地では草原で繁殖し、越冬期は海岸や川岸、干拓地などの湿った草原に生息する。昼間は草の中にいて、夕方から活動しネズミなどを捕らえる。

生息地の現状

府内の中心的な越冬地である巨椋干拓地では、畑地や刈り取り後の水田に生息し、河川敷にも出現する。近年越冬数が激減している。

生存に対する脅威

巨椋干拓地を分断する道路建設などが影響しているものと思われる。

必要な保全対策

採食地と昼間のねぐらとなる草地を併せて保全する必要がある。

文献 日高(監)(1997)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

アカショウビン

ブッポウソウ目カワセミ科
Halcyon coromanda

環 なし

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	府内では溪流沿いのよく茂った森林で極めて少数が営巣する。府内で知られている繁殖地は芦生、鞍馬山、久多などに限られている。
形態	全長 28cm。体の大部分は黄褐色を帯びた赤色で上面には紫色の光沢があり、腰の部分には縦長のりり色の羽毛がある。下面は黄色味を帯びる。嘴は太くて赤く、足も赤い。雌雄はほぼ同色だが、メスの方がやや色が淡い。	生存に対する脅威	林道建設後の森林の伐採や溪流の破壊の影響を受けると思われる。
分布	夏鳥として全国に渡来し、東南アジアに渡って越冬する。府内では芦生、鞍馬山、久多など限られた地域に生息する。 ◎ 府内の分布区域 中部地域、南部地域。	必要な保全対策	繁殖地の森林の保全をはかる必要がある。
生態的特性	全国のよく茂った林に渡来し、林床や溪流で得られる小動物(カエル、サワガニ、カタツムリなど)を採食する。枝の上で		

文献 日高(監)(1997)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ヤマセミ

ブッポウソウ目カワセミ科
Ceryle lugubris

環 なし

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なく、近年減少している。	生息地の現状	府内では由良川、安曇川、桂川の源流域などで少数が繁殖しているが近年減少している。
形態	全長 38cm。カワセミ類の中で日本では最も大きく、冠羽が目立つ。体の上面は白と黒のまだらで、オスは胸に黄褐色の帯と黒い斑点があり、メスでは黒斑が帯状にある。	生存に対する脅威	ダム湖の開発、河川改修や川岸の道路建設などにより、ヤマセミの採食環境として重要な大きな淵、止まり場となる樹木のセットが破壊されてきたことが主な原因と思われる。
分布	留鳥として離島を除く全国に生息する。府内では少数が主な河川の山間部に生息し、冬期は市街地近くの河川でも観察されることがある。 ◎ 府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	1970年代の北山地域におけるヤマセミの巣の分布調査の結果(西村 1979)と、現在の分布を比較・分析することで、今後の保全方針を検討する必要がある。
生態的特性	川沿いの決まった枝に止まり、魚を見つけるとダイビングして捕らえる。崖に直径約 10cm、深さ約 1mの横穴を掘って		

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、西村(1979)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

オオアカゲラ

キツツキ目キツツキ科
Picoides leucotos

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長28cm。アカゲラより少し大きくて嘴は比較的長い。背と中央尾羽は黒く、腰は白い。体の下面は淡黄褐色で顔から胸にかけて黒線が走り、脇には黒い縦線がある。オスは頭上から後頭までが黒く、メスでは黒い。

分布

北海道、本州、四国、九州などに分布するが個体数は少ない。府内では大江山、比叡山、鞍馬山などで局地的にごく少数が見られる。

◎府内の分布区域 全域(局地的)。

生態的特性

大木の特に枯れ木の多い自然林に生息する。材中にある節足動物を主な食物としており、特に大型甲虫の幼虫を多く採

食するほか、果実も採食する。森林の大木の高所に穴を掘って巣とし、一腹3~5卵を産む。雌雄が交代で14~16日間抱卵する。行動圏は広く200haを越える例もある。

生息地の現状

府内では比較的古木の残る大江山、比叡山、鞍馬山といった地域でごく少数が見られる。

生存に対する脅威

林道建設などに伴い、まとまった面積を持つ自然林が分断化され、規模が小さくなるのが最も脅威である。

必要な保全対策

繁殖地の森林の保全をはかる必要がある。

文献 日高(監)(1997)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

チョウゲンボウ

ハヤブサ目ハヤブサ科
Falco tinnunculus

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長オス30cm、メス33cm。翼開長69~74cm。ハヤブサ類の中では尾が最も長く見え、尾の先はあまり尖っていない。オスは頭上から顔が青灰色。

分布

主に本州中部以北で繁殖するほか、冬鳥として全国に渡来する。府内では、冬鳥として各地に渡来する。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

広い農耕地、河川敷、山林に出現する。餌はネズミ等の小型哺乳類や小鳥、昆虫など。崖で集団営巣するほか、近年、人工物を利用しての営巣例が増加している。

生息地の現状

木津川や宇治川、由良川などの開けた河川敷、巨椋干拓地などの広い農耕地、低山帯の山林などで越冬する。京都市内で人工物などを利用して少数が営巣を開始している。

生存に対する脅威

営巣時の人による攪乱。

必要な保全対策

人工物で営巣、街中での営巣に際しての保護が重要。

改訂の理由

準絶滅危惧種(越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない越冬個体群)であったが、京都市内で営巣を開始し、繁殖個体群の規模は極めて小さい状況であるので、絶滅危惧種とランクアップした。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

コチョウゲンボウ

ハヤブサ目ハヤブサ科
Falco columbarius

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	海岸に近い荒野、沼沢地、干拓地などの開けた場所に生息し、小鳥や時にはシギ・チドリ類などを捕食する。ユーラシア大陸中央部の営巣地では、単独つがいで営巣し、地上に小枝などを敷いて巣をつくり、一腹4~5卵を産む。
形態	全長オス28cm、メス31cm。オスは頭上から体の上面が青灰色で、尾の先端には黒帯がある。メスの体の上面は灰色味のある褐色で、尾には数本の黒帯があり、体の下面は白くて胸には黒い縦斑、腹には三日月斑がある。 ◎ 近似種との区別 尾はチョウゲンボウより短く、チゴハヤブサより長い。	生息地の現状	広々した農耕地や木津川などの河川敷に出現する。
分布	国内には冬鳥として少数が渡来する。府内では巨椋干拓地などでごく少数が越冬する。 ◎ 府内の分布区域 南部地域。	生存に対する脅威	農耕地が道路建設等により縮小・分断化しつつあり、生息環境は悪化しているものと思われる。
		必要な保全対策	主な越冬地である巨椋干拓地や木津川の自然環境の保全を進めるべきである。

文献 黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

ハヤブサ

ハヤブサ目ハヤブサ科
Falco peregrinus

環 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	海岸の崖などで営巣する。春秋はタカ類の渡りルートでよく観察され、冬期は平地の開けた場所に生息することが多い。主に小鳥を捕食する。産卵期は3~4月。一腹卵数は3~4卵。主にメスが29~34日間抱卵。雛はふ化後35~42日で巣立つ。
形態	全長オス38cm、メス51cm。翼開長84~120cm。背、翼、尾は暗青灰色で、尾は比較的短く黒帯がある。頬にはひげ状の黒斑が目立つ。下面は白くて腹は黄褐色を帯び、黒色横斑が密にある。幼鳥は上面が褐色、下面が淡褐色で胸から腹に黒褐色の縦斑がある。 ◎ 近似種との区別 チゴハヤブサは小さく、成鳥の体の下面に縦斑があり、下腹は赤茶色。	生息地の現状	府内では日本海の離島や海岸部の崖で営巣している。1995年以降府南部地域の採石場跡の断崖で営巣を開始し、雛が巣立った年もある。内陸部での営巣は近畿地方では初めてのケースである。
分布	留鳥として九州以北に分布し、冬鳥として全国に渡来する。主に本州中部以北~北海道で繁殖する。府内では北部地域や南部地域でごく少数が繁殖し、全域で越冬する。 ◎ 府内の分布区域 全域(繁殖期は北部地域、南部地域)。	生存に対する脅威	営巣地でのしつこい撮影行動が繁殖の妨害になることがある。
		必要な保全対策	特に内陸部の営巣場所の保護をはかる必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

サンショウクイ

スズメ目サンショウクイ科
Pericrocotus divaricatus

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長 20cm。体は細くて尾は長め、嘴の先は少しかぎ形に曲がる。オスは額が白く、頭頂から後頸と過眼線は黒い。メスは頭頂から後頸が灰色。

分布

夏鳥として本州と四国に渡来し、九州南部から南西諸島では留鳥として生息する。府内には夏鳥として渡来するが、個体数は少ない。

◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性

国内では3月下旬頃には姿を見せることがある。落葉広葉樹の高木、特にトチノキやホオノキが茂る環境に好んで営巣する。樹林の上層部においてフライキャッチングで昆虫を捕らえる。繁殖期は5~7月、巣は地

上4~15mの樹木上につくられる。年1回、一腹4~5卵を産み、抱卵期間は17~18日。雛は14日ほど雌雄から給餌を受ける。渡去は8月下旬に始まり、9月中旬には移動中の数十羽の群れが見られることもある。

生息地の現状

府内では明るい森林に生息し、ホオノキに営巣することが多い。渡来数は少なく、1970年代に比べるとかなり減少している。営巣環境の悪化に加え、越冬地における森林減少の影響が大きいと思われる。

生存に対する脅威

営巣林の破壊につながるような改変が脅威となる。

必要な保全対策

特に大木のトチノキやホオノキの保護に努める必要がある。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(絶滅危惧種)

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

コムクドリ

スズメ目ムクドリ科
Sturnus philippensis

環 なし

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なく、近年減少している。

形態

全長 19cm。オスは白い頭、赤茶色の頬、紫色の光沢のある黒い背、翼の肩に白斑があり、淡褐色の腰が目立つ。メスでは頭部から下面が灰白色。

◎**近似種との区別** ムクドリの腰は白く、嘴と足は黄色。

分布

本州中部からサハリン(樺太)南部にかけて繁殖し、冬はフィリピンやボルネオなどに渡る。国内では夏鳥として本州中部以北へ渡来する。府内へは旅鳥として少数が渡来する。

◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性

繁殖地では平地や低山地の林や村落など人家近くに生息する。昆虫や果実を採食する。樹洞や建物の隙間を巣とし、一腹4~6卵を産む。

生息地の現状

府内では4月中旬~5月上旬に山麓、及び平野の落葉広葉樹に数羽~10数羽の群れが観察される。秋の渡りは8月中旬~10月上旬頃にムクドリの群れに混じることがある。中下流の河川敷内のヤナギ林、周囲に木の多い耕地、市街地の緑地などで観察される。観察例は多くはなかったが、近年さらに減少している。

必要な保全対策

河川敷内のヤナギ林などの適切な保全が大切である。

文献 日高(監)(1997)、黒田(編・監)(1984)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★★↑

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

マミジロ

スズメ目ヒタキ科
Turdus sibiricus

環 なし

選定理由 春秋の渡りの時期に少数が渡来する一方で、極めて少数の繁殖の可能性が高いことが判明したため。

形態 全長24cm。オスは全身がほぼ黒く、眉斑が白、下腹には白い横斑、嘴は黒く、足は橙黄色。メスは上面オリーブ褐色で淡い眉斑がある。

分布 本州中部以北に夏鳥として渡来し、山地帯から亜高山帯で繁殖する。府内では渡りの時期に通過する旅鳥であるが、夏期の観察もまれにある。
◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性 昆虫、ミミズ、果実を採食する。樹木の分岐部などに枯れ枝やコケで巣をつくり、一腹3~5卵を産む。

生息地の現状 渡りの時期に各地の山林に出現する。一部の山林では越冬しているという情報があるので、府内で繁殖している可能性もある。越冬情報がある地域において、営巣していないかどうかを調査する必要がある。

生存に対する脅威 まだ小規模の営巣地なので人工的改変の影響を受けやすい。

必要な保全対策 営巣林を特定して保全することが必要である。

改訂の理由 少数の通過個体群としていたが、極めて少数の繁殖の可能性が高いことが判明したため。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、梶田学

★★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

コサメビタキ

スズメ目ヒタキ科
Muscicapa latirostris

環 なし

選定理由 夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少している。

形態 全長13cm。サメビタキ属3種の中では最も小さい。体の上面は少し褐色味のある灰色、目先の上は白い。下面は少し不明瞭な縦線がある。幼鳥は頭部、背、翼に灰白色の斑点が散在する。

◎**近似種との区別** サメビタキは胸から脇が灰褐色。風切羽や雨覆に淡褐色の羽縁がある。

分布 ユーラシア大陸北東部で繁殖し、東南アジアやインドへ渡る。国内では夏鳥として九州以北に渡来する。府内には夏鳥として全域に渡来するが、個体数は少なく近年減少している。
◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性 平地から山地の明るい落葉広葉樹林に渡来する。枝に止まって見張り、飛んでいる昆虫を見つけると追って採食する。樹

木の横枝に椀形の巣をつくり、一腹4~5卵で、メスのみが12~14日間抱卵する。12~14日間育雛する。

生息地の現状 府内の山地で少数が繁殖するほか、秋の渡りの時期に各地で観察される。1980年代には京都府立植物園でも営巣していたが、現在営巣情報はない。府内の繁殖情報も減少している。

生存に対する脅威 人目を触れる場所で営巣する場合は人の攪乱が営巣に影響する。

必要な保全対策 営巣地により人による攪乱を防ぐ必要がある。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★★

京 絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

クロジ

スズメ目ホオジロ科
Emberiza variabilis

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 17cm。オスの夏羽では全体が暗青灰色で腹部は少し淡色。外側尾羽の白色はない。メスの頭中央線と眉斑は黄褐色。頭側線と頬は褐色(頭頂に2本の褐色の頭側線)。背はオリーブ褐色で黒い縦斑がある。

分布

本州中部以北で繁殖し、本州南西部以南で越冬する。本州では日本海側の山地に多く、兵庫県氷ノ山でも繁殖記録がある。府内では芦生で繁殖し、冬期は全域で越冬する。

◎府内の分布区域 全域(繁殖期は南丹市美山町)。

生態的特性

繁殖期はササの生えた亜高山針葉樹林や混交林で、冬期は山地の薄暗い林で過ごす。繁殖期は昆虫、冬期は木や草の種

子を主に地上で採食する。巣は地上1~2mの低木の中、ササの茎が密生する上に乗せるようにつくる。造巣はメスのみが行い、5~8月に一腹3~5卵を産み、雌雄が約12日間抱卵する。

生息地の現状

府内では1982年頃から芦生のクマザサの生えた落葉広葉樹林で少数個体のさえずりが聞かれ、2001年に営巣が確認された。冬期は府内全域に少数が越冬する。府内では芦生でしか営巣が確認されていない。

生存に対する脅威

芦生の繁殖個体群は、シカによりササが消失し営巣環境が消失したため近年絶滅に近い状況になりつつある。

必要な保全対策

芦生の営巣地を保護し、他に営巣している地域がないか調査する必要がある。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、梶田学



鳥類
(絶滅危惧種/準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

ヤマドリ

キジ目キジ科
Phasianus soemmerringi

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なくはないが、近年減少している。

形態

全長オス 125cm、メス 55cm。オスは全体が赤銅色であり、背胸翼腹には白色の羽縁がある。メスは小さく、尾は赤茶色で外側尾羽の先は黒と白。

分布

留鳥として本州から九州の山地に生息する。府内では市街地に近い低山から深山まで広く分布している。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

草や木の葉、種子、昆虫、クモ類などを採食する。地上にくぼみをつくり、枯れ葉を敷いた巣をつくる。一腹7~13卵を

産み、メスのみが約24日間抱卵し、ふ化後は雛を連れて巣を離れる。

生息地の現状

狩猟圧は高いが、放鳥もされている。観察頻度が減り、猟師も減少したというが、原因は不明。

生存に対する脅威

地上で営巣するので、地上性捕食者の増加の影響も考えられる。

必要な保全対策

生息環境のモニタリングを進め保全課題を明らかにする必要がある。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

コハクチョウ

カモ目カモ科

Cygnus columbianus

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	家族で渡来し、安全な開水面で就暁する。昼間は浅瀬で水草を、夜間は水田の刈り跡で落ち穂を採食することが多い。
形態	全長120cm。全身が白色で、オオハクチョウより少し小さいがよく似ている。嘴の先は黒く基部は黄色で、黄色部の先は丸い。	生息地の現状	府内では宮津市阿蘇海に約20羽が渡来するほか、久美浜湾や京都市内にも飛来することがある。
分布	北極海沿岸のツンドラ帯で繁殖し、冬鳥として本州以北に渡来する。国内の越冬地はオオハクチョウより南に偏る。府内では宮津市阿蘇海に少数が渡来する。 ◎府内の分布区域 北部地域(宮津市)。	生存に対する脅威	ねぐらとする河口での工事など。
		必要な保全対策	採食生態等を調査し、採食地と休息地を一体として保全する必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

オシドリ

カモ目カモ科

Aix galericulata

環 情報不足(DD)

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は極めて少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	虫などを食べる。営巣は樹洞で行う。一腹卵数は7~10卵。28~30日でふ化し、雛は巣の下へ落下して、メス親に連れられて水辺へ達して育つ。
形態	全長45cm。オスは美しい色彩をしていて、後頭の羽毛は冠羽状になっている。三列風切の一部が銀杏羽と呼ばれる帆のような目立つ形になっている。メスは灰褐色で目の周囲が白い。 ◎近似種との区別 トモエガモのメスは褐色味が強く、目の回りが白くない点で、オシドリのメスと区別できる。	生息地の現状	府内では桂川千鳥淵や亀岡市池尻等で巣立ち後の幼鳥が確認され、北山の一部や山間の水田で夏期に観察されている。冬期は北方からの越冬個体も加わり、山間の河川や池で観察される個体が増加するが、まとまった群れが見られる場所は限られている。
分布	北海道、本州、九州で繁殖し、西日本で越冬する個体が多い。府内でも数か所で繁殖しており、冬期は山間の河川や池で観察される。 ◎府内の分布区域 全域。	生存に対する脅威	越冬する池などにおける人為的攪乱。
		必要な保全対策	繁殖環境と越冬環境を詳細に把握する必要がある。
生態的特性	平地から山地にかけての広葉樹が覆い被さるような薄暗い水辺を好む。カシやシイなどのドングリを好んで採食するほか、水草やイネ科植物の種子、水生昆	改訂の理由	山地での繁殖個体群が極めて少ないではなく少ないと判断されるため。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、中村桂子

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

シマアジ

カモ目カモ科
Anas querquedula

環 なし

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少ないが、近年減少はしていない。

生植物などの植物質と、軟体動物などの動物質の両方を採食する。

形態

全長 38cm。オスの頭上は黒く、明瞭な白い眉斑があり、顔は紫褐色。メスは褐色で黒褐色の斑があり、過眼線と目の下を通る黒い線が明瞭。

生息地の現状

府内では春秋の渡りの時期に池沼や河川、水田などに少数が立ち寄る。

分布

北海道東部と愛知県で繁殖記録があるが、多くは春秋の渡り期に渡来する。府内では春秋に池沼や河川、水田などに渡来する。

生存に対する脅威

中継地での人為的攪乱。

必要な保全対策

中継地の環境の詳細な把握が必要。

生態的特性

日本よりさらに南の東南アジアまで渡るため、厳寒期に国内で越冬している個体は少ない。内陸の水辺で冬を過ごす。水

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳



鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

トモエガモ

カモ目カモ科
Anas formosa

環 絶滅危惧Ⅱ類(VU)

選定理由

越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

す。主に植物質を採食する。ドングリを好み、草の種子なども食べる。

形態

全長 40cm。オスの顔には黄白色と緑黒色のともえ形の斑紋がある。メスは紫褐色で黒い斑があり、嘴の根元に小白円紋がある。

生息地の現状

府内で比較的まとまった数が渡来する場所としては、喜撰山ダムと宇治川が知られていたが、まとまった数が渡来する場所はなくなっている。

分布

冬鳥として本州以南の日本海側に多く渡来する。年により渡来数や渡来地は大きく変化する。府内で少数が越冬する。

生存に対する脅威

越冬地における人為的攪乱。

必要な保全対策

越冬環境を詳細に把握する必要がある。

生態的特性

主に関東地方以西で越冬し、大きな群れは少ないが、年によって数百羽の群れが見られることもある。湖沼や河川ですご

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、中村桂子

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

シノリガモ

カモ目カモ科

Histrionicus histrionicus

環 なし

選定理由 冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態 全長43cm。体は少し丸く、嘴は小さく、尾は比較的長く尖っている小型の海ガモ。オスの頭、背、胸、腹は紫黒色。顔の前半、目の後方などに白斑があり、脇は赤栗色。メスは全体が灰黒褐色。

分布 本州北部の山間で少数が繁殖するが、主に冬鳥として本州中部以北の岩の多い海岸に渡来する。府内では宮津湾や丹後半島で確認されている。

◎**府内の分布区域** 北部地域の海域。

生態的特性 繁殖地のカムチャツカでは、流れの速い、礫のある川だけで繁殖している。8月末から10月末にかけて越冬地へ南下が見

られる。冬期は波の荒い岩礁の上で小群で過ごし、潜って小型甲殻類や軟体動物などを採食する。

生息地の現状 1997年1月のナホトカ号重油流出事故の際には油汚染された個体が確認され、翌年の事後調査では19羽が観察された。

生存に対する脅威 重油事故が脅威となる。

必要な保全対策 北部地域の海域における現状を把握するために、海上調査を系統的に行う必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1998)、ロブコフ(1988)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★★ **新**

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) リスト外

ホオジロガモ

カモ目カモ科

Bucephala clangula

環 なし

選定理由 個体数が少ない越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。

形態 全長45cm。オスの頭部は三角形で緑色光沢のある黒、嘴の基部近くに白い丸い斑がある。飛行時には、雨覆の白と風切羽の黒とのコントラストが明瞭。メスは頭部は褐色で白い首輪がある。

分布 ユーラシア大陸および北米大陸北部で繁殖し、日本には冬鳥として九州北部に渡来し、河口、内湾、沿岸、湖沼、河川などに生息する。

◎**府内の分布区域** 北部地域の海域。

生態的特性 潜って軟体動物、甲殻類、小魚などを捕食する。繁殖期は森林内の餌が豊富な湖沼に生息する。樹洞で営巣し、巣箱も利用する。メスの帰巣性が強く、前年の同じ巣に戻ることも多い。

生息地の現状 京都府・滋賀県・大阪府では1桁から2桁の越冬数であり、個体数は少ない。1998年1月の北部沿岸調査で19羽が確認されている。

生存に対する脅威 レジャーや河川改修で生息環境が悪化することが指摘されている。

必要な保全対策 越冬環境を詳細に把握する必要がある。

改訂の理由 本来は前回、準絶滅危惧種相当であったが、データの見落としにより掲載されなかったため。

文献 江崎、和田(編)(2002)、日高(監)(1996)、京都府(1998)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、中村桂子

★★ **新**

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)リスト外

ミコアイサ

カモ目カモ科
Mergus albellus

環 なし

選定理由	個体数が少ない越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。	生息地の現状	京都府・滋賀県・大阪府では2桁程度の越冬数である。
形態	全長42cm。小型のアイサ類。オスは大部分が白く、目の周囲、後頭の冠羽の下、胸部の二本の線、肩羽などが黒い。メスは頭上から後頭にかけて茶褐色で、顔は白くて体は灰色。	生存に対する脅威	河川改修・水質悪化・レジャーなどで生息環境が悪化することが指摘されている。
分布	冬鳥として九州以北に渡来し、湖沼、池、河などに生息するが、北海道では少数が繁殖する。 ◎ 府内の分布区域 北部地域、南部地域。大きな河川の中、下流や沿岸域。	必要な保全対策	越冬環境を詳細に把握する必要がある。
生態的特性	潜って小型の魚類、甲殻類、貝類などを捕食する。他のアイサ類と違って、魚類よりも他の水生動物をよく採食する。繁殖期は、森林内の流れの速くない川や湖沼にすみ、水辺に近い樹洞で営巣する。巣箱を使うこともある。	改訂の理由	本来は前回、準絶滅危惧種相当であったが、データの見落としにより掲載されなかったため。

文献 江崎、和田(編)(2002)、日高(監)(1996)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子



鳥類
(準絶滅危惧種)

★★ **新**

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)リスト外

カワアイサ

カモ目カモ科
Mergus merganser

環 なし

選定理由	個体数が少ない越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。	生息地の現状	近畿地方の府県の越冬数は1桁か2桁であり個体数は少ない。
形態	全長65cm。アイサ類の中で最も大きい。オスの頭部は緑黒色で長い冠羽はない。背は黒く体の下面は白くて淡紅色を帯びている。嘴と足は赤い。	生存に対する脅威	レジャーや河川改修で生息環境が悪化することが指摘されている。
分布	冬鳥として九州以北に渡来するが、北海道の一部地域では少数が繁殖する。 ◎ 府内の分布区域 北部地域、南部地域。沿岸域、ときどき河川。	必要な保全対策	越冬環境を詳細に把握する必要がある。
生態的特性	越冬中は内陸の大きな湖沼や内湾などですごす。数羽から100羽くらいのさまざまな群れとなる。活動的で頭だけを水中に入れて魚を探しながら泳ぎ、潜って採食する。	改訂の理由	本来は前回、準絶滅危惧種相当であったが、データの見落としにより掲載されなかったため。

文献 江崎、和田(編)(2002)、日高(監)(1996)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

カイツブリ

カイツブリ目カイツブリ科
Tachybaptus ruficollis

環 なし

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は少なくはないが、近年減少している。	生息地の現状	池岸にヨシなどが十分生育していれば繁殖することが多い。
形態	全長26cm。翼開長43cm。カイツブリ類の中で最小。夏羽では顔から首の上部は赤褐色、嘴の根元は黄白色。冬羽では上面褐色で下面は淡色。	生存に対する脅威	池の埋め立てや水辺の植生を破壊する整備事業、オオクチバスなどの外来種の影響で個体数が減少している。
分布	全国の池、湖沼、河川などに分布する。府内では一年を通して池などに出現する。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	埋め立てを防ぎ、外来種対策をする。
生態的特性	池や井堰上流部の湛水域などの、水生のヨシ群落中に浮巣をつくって営巣することが多い。水中の小魚やエビなどを採食する。		

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993、1998)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

アオバト

ハト目ハト科
Treron sieboldii

環 なし

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	府内では、芦生、八丁平、比叡山、丹後半島の落葉広葉樹林に積雪期を除いて生息し、冬期は京都市内でも観察される。営巣地として重要なのは、落葉広葉樹林がまとまって分布している地域と考えられる。
形態	全長33cm。体は緑色で額から前頸、胸は黄色味が強く、腹は白くて脇から下尾筒には黒緑色の縦斑がある。オスの小雨覆は栗茶色。 ◎近似種との区別 奄美大島以南に生息するズアカアオバトは黄色味が少なく腹は緑色。	生存に対する脅威	まとまった面積の落葉広葉樹林は、林道建設などによって減少傾向にある。
分布	北海道では夏鳥、本州以南では留鳥または漂鳥として繁殖し、北部のものは冬期には南へ移動する。南西諸島では冬鳥。府内では、山地で繁殖するほか、冬には平地でも観察される。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	持続的に落葉広葉樹林が保全されるようにする必要がある。
生態的特性	丘陵地から山地の森林に生息し、主に樹上で果実を採食する。春から秋に群れで海岸の岩礁に飛来し海水を飲む習性が知られている。	改訂の理由	少ないながら観察例が増えており、極めて少ないとの判断を改訂した。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

オオハム

アビ目アビ科
Gavia arctica

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	北部地域の海域に越冬期に少数が確認されている。近年減少していないと思われるが、越冬状況の詳細は不明である。1997年1月のナホトカ号重油流出事故の際は、オオハムの死体が京都府で8羽回収され、オオハム類(シロエリオオハムを含む)が数10羽観察されている。
形態	全長72cm。翼開長120cm。雌雄同色。冬羽の上面は黒褐色で、下面は白い。夏羽の前頸は黒くて緑色の光沢がある。	生存に対する脅威	タンカー事故による海洋汚染が最大の脅威である。
分布	ユーラシア大陸の亜寒帯で繁殖し、国内へは冬鳥として全国の海上に渡来する。府内では北部地域の海域で越冬する。 ◎府内の分布区域 北部地域の海域。	必要な保全対策	重油事故が起こらないようにする必要がある。
生態的特性	潜水して水中で魚を追って捕食する。繁殖地のカムチャツカではアビが営巣しているような小さい湖沼よりは大きな湖沼(直径100m以上)で営巣している。		

文献 京都府(1998)、ロブコフ(1988)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(準絶滅危惧種)

★★ 新

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)リスト外

ヒメウ

カツオドリ目ウ科
Phalacrocorax pelagicus

環 絶滅危惧IB類(EN)

選定理由	少ない越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。	生息地の現状	北部地域の海域に越冬期に少数が確認されている。近年減少していないと思われるが、越冬状況の詳細は不明である。
形態	全長73cm。全身黒くて青色や紫色の光沢がある。繁殖期には嘴の根元は赤褐色になり、頭頂と後頭には冠羽が生じる。	生存に対する脅威	タンカー事故による海洋汚染が脅威となる。
分布	北海道や本州北部、九州の日本海側で繁殖し、九州以北で越冬する。 ◎府内の分布区域 北部地域の海域で越冬。	必要な保全対策	詳細な越冬環境調査が必要である。
生態的特性	潜水して水中で魚を追って捕食する。主に岩礁のある海岸部に生息するが、内湾や河口でも見られることがある。ウミウの群れに混ざっていることが多い。	改訂の理由	個体数は少なくはないとされランク外だったが、少ない越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993、1998)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、狩野清貴

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

ササゴイ

ペリカン目サギ科
Butorides striatus

環 なし

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	街路樹や社寺林に小規模な集団営巣地が確認されている。営巣地において人的な攪乱がなければ比較的営巣が続くようである。
形態	全長52cm。成鳥は頭上黒色。背と雨覆は青緑色の光沢のある黒褐色で、下面は淡い紫灰色。幼鳥は全体に黒褐色で喉の両側の白い線が目立つ。	生存に対する脅威	営巣時に人的攪乱が脅威となる。
分布	◎府内の分布区域 北部地域の海域。	必要な保全対策	営巣木の保護と営巣時の保護。
生態的特性	河川の水際や浅瀬で小魚を採食することが多い。街路樹や社寺林、河川敷のヤナギ林などに小さなコロニーをつくり繁殖する。		

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

チュウサギ

ペリカン目サギ科
Egretta intermedia

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	コサギ・ゴイサギ等に混じって集団営巣するが、個体数は少ない。営巣林の特性とチュウサギの営巣数との関連はわかっていない。
形態	全長69cm。コサギより大きくて頸と足は長い。嘴は短い。全身白く、夏羽ではみの状の飾り羽が背から出て、嘴は黒く目先は黄色。	生存に対する脅威	営巣林の伐採。人為的攪乱。
分布	夏鳥として本州以南に渡来し、西南日本では一部が越冬する。府内では河畔林や山地で他のサギ類とともに集団営巣する。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	サギ類の集団営巣地の継続的把握にたつた保全が必要。
生態的特性	流れのある川の中ではあまり採食せず、浅い水辺や草地をゆっくり歩いて昆虫、両生類、魚類などを採食する。		

文献 京都府(1993)、佐々木(2001)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

オオバン

ツル目クイナ科
Fulica atra

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 39cm。クイナ科の中では最も大きくて太っている。体は黒く、翼も黒くて次列風切の先端は白い。

分布

北海道、本州、九州の一部で繁殖し、本州以南では留鳥、または冬鳥として分布する。府内では少数が越冬する。

◎**府内の分布区域** 中部地域、南部地域。

生態的特性

岸にヨシが生えた湖岸などでよく見られ、潜水して水草などを採食する。湖沼周辺のヨシの中などに草を積み上げて

造巣する。一腹 1~10 卵を産み、21~24 日間抱卵し、その後、約 2 か月給餌をする。

生息地の現状

滋賀県では 1970 年代以降、琵琶湖で繁殖し越冬個体数も多くなったが、府内では河川の中流域や池で少数が越冬するのみである。桂川で繁殖例(1990 年代はじめと 1996 年)はあるが、継続していない。

必要な保全対策

湿性植物の多い環境の保全。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(準絶滅危惧種)

★★ ↓

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

ジュウイチ

カッコウ目カッコウ科
Cuculus fugax

環 なし

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 32cm。頭上と体の上面は光沢のある黒、尾は灰褐色と黒の横帯。下面は橙黄色で腹に近いほど淡くなる。

◎**近似種との区別** 成鳥はハイタカのおスに似るが、小型のタカは翼の先が尖ってない。

分布

夏鳥として北海道から九州にかけて渡来し、標高の高い山地にも生息する。府内では極めて少数が山地に夏鳥として渡来する。

◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性

主として樹冠部で昆虫を採食し、特に毛虫を好んで食べる。主にコルリ、ルリビタキ、オオルリの巣に托卵する。産卵期は主に 6 月上旬~7 月上旬である。

生息地の現状

府内では、広い老熟した落葉広葉樹がある芦生、大江山、八丁平などへ夏鳥として渡来する。芦生、大江山、八丁平にはコルリが生息しているので、コルリに托卵している可能性は高いが、コルリがいない林でも 6~7 月にさえずりが聞かれることから、オオルリ、キビタキなどにも托卵しているものと思われる。

生存に対する脅威

老熟した落葉広葉樹林が、様々な理由で小規模化することにより、生息環境が悪化しているものと思われる。

改訂の理由

京都北山などでは少数ながら確認例があり極めて少なくはないので改訂した。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

ツツドリ

カッコウ目カッコウ科
Cuculus saturatus

環 なし

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なくはないが、近年減少している。	食する。センダイムシクイ、ヤブサメ、キビタキなどに托卵する。卵は白地に淡色の小斑が散在する。
形態	全長33cm。カッコウに似ているが、下面の横斑は太くて粗く、目は暗色。メスには赤色型がある。	生息地の現状
分布	夏鳥として九州以北に渡来する。府内にも夏鳥として渡来する。 ◎府内の分布区域 全域。	生存に対する脅威
生態的特性	4月下旬に渡来し、低山帯の落葉広葉樹林や亜高山帯の針葉樹林に生息する。昆虫を主食とし、鱗翅類の幼虫を好んで採	

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

カッコウ

カッコウ目カッコウ科
Cuculus canorus

環 なし

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性
形態	全長35cm。尾は長くくさび形。翼の先は尖る。頭部と体の上面は青灰色。尾は灰黒色で白点があり、胸と腹は白くて細い黒帯が並ぶ。ツツドリの下面の横斑は太くて粗い。	生息地の現状
分布	夏鳥として九州以北に渡来するが、西日本には少ない。府内では一部の地域へ少数が定期的に渡来する。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★ 新

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)リスト外

環 なし

タゲリ

チドリ目チドリ科
Vanellus vanellus

選定理由

個体数が少ない越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。

形態

全長 31.5cm。頭上は黒くて後頭に長い冠羽がある。後頸から体の上面は黒く、緑色や淡紅色の光沢がある。下尾筒は橙色。飛翔時には体の下面の白と黒の対照が明瞭。

分布

ユーラシア大陸で広く繁殖する。冬鳥として本州以南に渡来する。北陸地方や関東北部などで繁殖記録がある。府内には冬鳥として渡来する。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

水辺や、農耕地や河川敷の草地に生息し餌をとる。府内では10月中旬頃に姿を見せ、翌年4月下旬頃に途去する。普通は数羽～20羽程度の小群で行動している。

生息地の現状

京都府近隣のほとんどの府県で越冬数は少なく減少傾向にある府県も多い。府内では久御山町の農地で5～30羽の越冬群が確認されている。

生存に対する脅威

河川・水田などの改修や整備による生息環境の悪化が指摘されている。

改訂の理由

本来は前回、準絶滅危惧種相当であったが、データの見落としにより掲載されなかったため。

文献 江崎、和田(編)(2002)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、脇坂英弥

鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

環 なし

ムナグロ

チドリ目チドリ科
Pluvialis dominica

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なくはないが、近年減少している。

形態

全長 24cm。夏羽では顔、前頸、胸、腹は黒く、体の上面は黄褐色と黒の斑で、額、頸側、胸側、脇は白い。

分布

ユーラシア大陸北部などのツンドラ地帯で繁殖し、オーストラリアなどで越冬する。国内では旅鳥として全国の水田、干潟などに渡来し、少数が越冬する。府内にも渡りの時期に立ち寄る。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

主に水田や川筋に出現し、干潟では少ない。ミミズや昆虫などの小動物を採食する。

生息地の現状

府内では春秋の渡りの時期に渡来するが、秋の方が多。泥質の多い河川敷や耕作中の水田、畑地に出現する。旅鳥として普通種であるが、渡来数は減少している。

必要な保全対策

春秋の中継地の環境の継続的把握が必要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

イカルチドリ

チドリ目チドリ科
Charadrius placidus

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。個体数は少ないが、近年減少はしていない。

生息地の現状

府内では淀川水系、由良川水系の開けた河川敷の砂礫地や中州、造成地などで営巣する。

形態

全長21cm。コチドリより少し大きくて嘴は長い。顔の斑紋は淡く、目の縁の黄色と胸の帯も淡色である。飛ぶと翼に淡色の帯が出る。

生存に対する脅威

河川の中流域の砂礫州に車や人が侵入することが脅威となっている。

分布

九州以北に分布し、北海道では夏鳥で、他では留鳥。府内では留鳥として淀川水系、由良川水系に分布する。

必要な保全対策

砂礫州の保全や車の進入規制が必要である。

生態的特性

開けた河川敷の砂礫地や中州、造成地などに生息し営巣する。水生昆虫やミミズなどの小動物を採食する。冬は数羽～十数羽の小群で川原や浅い水辺等に生息する。

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

セイタカシギ

チドリ目セイタカシギ科
Himantopus himantopus

環 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少ないが、近年減少はしていない。

生態的特性

昆虫や小魚などを採食する。岸辺の地上にヨシの葉などで巣をつくり一腹4卵を産む。

形態

全長32cm。嘴は真っ直ぐで長くて細い。足は非常に長い。オスの夏羽では頭上から後頸は黒く、体の上面は黒色、残りは白い。嘴は黒く、足は淡紅色。メスは背や翼に褐色味があり、頭部は白っぽい。

生息地の現状

府内では春秋に旅鳥として少数が水田などに渡来する。

分布

ユーラシア大陸などの中緯度地域で繁殖し、冬期はオーストラリアなどへ渡る。国内では主に旅鳥として各地に渡来するが、千葉県では繁殖し、東京湾周辺に周年生息する。府内には春秋に少数が渡来する。

必要な保全対策

春秋の中継地の環境の継続的把握が必要である。

◎府内の分布区域 南部地域。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

オオジシギ

チドリ目シギ科

Gallinago hardwickii

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 30cm。タシギより大きくて少し淡色に見える。次列風切先端に白線はなく、下雨覆には一面に黒斑がある。尾羽は 16~18枚。

分布

主たる繁殖地は日本で、北海道と本州北部の草原、本州中部の高原で繁殖し、冬はオーストラリアに渡る。府内では主に南部地域で春秋に観察される。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

生態的特性

ミミズや昆虫などを採食する。

生息地の現状

府内では3月下旬~4月下旬及び8月中旬~9月中旬にかけて、主に南部の水田の畦や休耕地、浅い河川の泥地などで観察される。

生存に対する脅威

巨椋干拓地における道路建設などが影響を及ぼすことが考えられる。

必要な保全対策

春秋の中継地の環境の継続的把握が必要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

チュウジシギ

チドリ目シギ科

Gallinago megala

環 なし

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 27cm。姿、形はオオジシギと酷似している。他種に比べ春の羽衣はバフ色味が強く、秋は暗色に見える傾向がある。尾羽は 18~26枚で、通常 20枚。外側尾羽の幅は 2~4mm。飛翔時、翼先はオオジシギより丸く、次列風切先端にわずかに細い白線が出るものがある。

分布

旅鳥として各地に渡来し、府内では春秋に巨椋干拓地などに出現する。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

生態的特性

日本では水田、蓮田、川や沼などの水域の岸に生息し、主に小型無脊椎動物を採食する。

生息地の現状

府内では巨椋干拓地周辺の畑地、草地の畦などに少数ながら出現する。シギ・チドリ類の熱心な観察者の増加により、観察例が増加しつつある。

必要な保全対策

春秋の中継地の環境の継続的把握が必要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

チュウシャクシギ

チドリ目シギ科

Numenius phaeopus

環 なし

選定理由	春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なくはないが、近年減少している。	生息地の現状	巨椋干拓地では、春に時には100羽を越える集団ねぐらが見られたが、近年は消失しつつある。
形態	全長42cm。ダイシャクシギやホウロクシギより小さくて嘴が短い。頭中央線はバフ色、頭側線は黒褐色。腰と上尾筒は白い。	生存に対する脅威	道路建設や水田の圃場整備などが、生息環境の悪化をもたらしている可能性がある。
分布	シベリアの高緯度地方で繁殖し、ニューギニアやオーストラリアなどで越冬する。国内では旅鳥として全国に渡来、南西諸島では少数が越冬する。府内では春の記録が多く、秋は少ない。 ◎府内の分布区域 北部地域、南部地域。	必要な保全対策	春秋の中継地の環境の継続的の把握が必要である。
生態的特性	干潟や河口部、しばしば内陸の水田などで甲殻類や昆虫を採食する。		

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

アオアシシギ

チドリ目シギ科

Tringa nebularia

環 なし

選定理由	春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	干潟や内陸の湿地や水田などに出現し、一部は越冬する。小魚、カエル、昆虫、ゴカイ、甲殻類などを採食する。
形態	全長35cm。嘴は少し上に反り、足は長く緑青色。夏羽では頭上は灰色で黒い縦斑があり、体の上面は灰色で黒い軸斑と白い羽縁がある。下背、腰、上尾筒、腹は白い。	生息地の現状	府内では中下流域の河川の岸辺や河口部、耕作中の畑地や水田に出現することが多い。
分布	ユーラシア大陸北部で繁殖し、冬は、東南アジアやオーストラリアへ渡る。国内では旅鳥として全国に渡来する。府内では主に8月上旬～9月下旬に少数が観察され、春の観察記録は秋より少ない。 ◎府内の分布区域 北部地域、南部地域。	生存に対する脅威	河川改修工事や水田の圃場整備などが、生息環境の悪化につながるおそれがある。
		必要な保全対策	生息環境の詳細な把握が必要である。

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

クサシギ

チドリ目シギ科
Tringa ochropus

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長24cm。タカブシギより少し大きくて、足は比較的短い。夏羽では頭上と体の上面が灰黒褐色で小さな斑点があり、上尾筒は白い。

分布

ユーラシア大陸北中部で繁殖し、冬は、中国やインドなどへ渡る。国内では旅鳥として全国へ渡来し、関東以西では越冬する。府内では秋の渡り期に見られる。厳冬期の観察はかなり少ない。

◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性

内陸の水田や河川に出現し、一部は越冬する。単独で昆虫、甲殻類、カエルなどを採食する。

生息地の現状

府内では平地のため池、中下流域の河川の岸辺や河口、細い水路などに出現することが多い。

生存に対する脅威

河川改修工事などが、生息環境の悪化につながるおそれがある。

必要な保全対策

越冬環境の詳細な把握が必要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

キアシシギ

チドリ目シギ科
Heteroscelus brevipes

環 なし

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なくはないが、近年減少している。

形態

全長25cm。夏羽では頭上から体の上面はすべて灰褐色。眉斑は白い。飛行時に翼の上面に白帯は出ず、下面は暗灰色。

分布

カムチャツカ、アラスカなどで繁殖し、冬は南西諸島、オーストラリアや東南アジアへ渡る。国内では旅鳥として全国に渡来する。府内では春秋の渡り期に若狭湾沿岸や南部地域に出現する。

◎**府内の分布区域** 北部地域、南部地域。

生態的特性

干潟や砂浜、水田や河川など幅広く湿地に出現し、水生昆虫やミミズなどを採食する。

生息地の現状

府内では平地のため池、中下流域の河川の岸辺や河口、耕作中の畑地や代かき中の水田などに5月上中旬、および8月に単独または数羽で観察される。近年、渡来数は減少している。

必要な保全対策

春秋の中継地の環境の継続的把握が必要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

イソシギ

チドリ目シギ科
Actitis hypoleucos

環 なし

選定理由 留鳥として年中府内に生息する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。

生態的特性 海岸や湖岸、川岸で営巣する。主として水生昆虫を採食する。

形態 全長 20cm。頭上から体の上面が灰黒褐色で、飛翔時に翼には明瞭な白帯が出る。腹部の白色が翼のつけ根の前に食い込んでいる。

生息地の現状 府内では河川や海岸、平地のため池などに周年出現する。本種の確実な繁殖記録として、木津川において 2002 年 6 月に親鳥について歩く雛 3 羽、2003 年 6 月に抱卵中の成鳥 1 羽の確認例がある(脇坂、中川 2005)。

分布 極北を除くユーラシア大陸で広く繁殖する。冬は南日本から、オーストラリアや東南アジアへ渡って越冬する。日本全国に分布する。本州中部以北では夏鳥で、他では留鳥。府内では冬期に個体数が増加するが、繁殖期にも少数が生息しており、近年木津川において繁殖が確認された。

生存に対する脅威 特に雛の時期の捕食者。

◎**府内の分布区域** 全域。

必要な保全対策 他の地域でも繁殖しているものと思われ、府内の繁殖状況を詳細に把握することが必要である。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)、脇坂、中川(2005)

執筆者 須川恒、脇坂英弥

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

ウズラシギ

チドリ目シギ科
Calidris acuminata

環 なし

選定理由 春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少なくはなないが、近年減少している。

生態的特性 内陸の湿地や水田、干潟に出現し、小甲殻類、貝、昆虫を採食する。

形態 全長 22cm。夏羽では頭上は赤褐色で黒い縦斑があり、冬羽では茶褐色味が少し淡くなる。背には V 字形の白線がある。

生息地の現状 府内では泥質の多い河川の中流域、代かき中や田植え直後の水田、休耕田に出現する。巨椋干拓地などで少数ながら毎年観察されているが、近年減少している。

分布 シベリア北部の一部で繁殖し、オーストラリアやインドなどで越冬する。国内では旅鳥として全国に渡来する。沖縄では少数が越冬する。府内では春より秋の渡り期に多く、巨椋干拓地などで観察されている。

必要な保全対策 春秋の中継地の環境の継続的把握が必要である。

◎**府内の分布区域** 南部地域。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★ 新

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)リスト外

ハマシギ

チドリ目シギ科
Calidris alpina

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由

個体数が少ない越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。

形態

全長 21cm。嘴は比較的長くてわずかに下に曲がっている。夏羽では腹は白くて中央に大きな黒斑がある。飛翔時には翼に白帯が出る。冬羽では、下面は白い。

分布

ユーラシア大陸やアメリカ北部の北極海沿岸の広い範囲で繁殖する。主に本州以南の多くの箇所越冬するが春秋期に通過して南下する群れも普通である。

◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性

越冬地では河川や水田などで群れで生息する。嘴を泥の中に差し込んで探ったり、泥の表面をつついたりしながら、ゴカイ類や小さな貝類などを採食する。

生息地の現状

京都市市街地の鴨川では、1980年代の冬には最大 400~500羽が越冬していたが、1990年代になって激減した。全国的にも越冬数が減少している。

必要な保全対策

越冬地や中継地となる湿地の保全、鴨川など市街地を流れる河川について、都市の湿地保全の観点から注目する必要がある。

改訂の理由

本来は前回、準絶滅危惧種相当であったが、データの見落としにより掲載されなかったため。

文献 江崎、和田(編)(2002)、日高(監)(1996)、京都府(1998)、真木、大西(2000)、須川(2005)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子



鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

ハイタカ

タカ目タカ科
Accipiter nisus

環 準絶滅危惧 (NT)

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長オス 32cm、メス 39cm。翼開長 62~76cm。オスは上面は灰青色で、白い眉斑があり、下面は白色の地に黄赤褐色の横斑がある。

分布

北海道では夏鳥、本州では留鳥として繁殖し、本州以南で越冬する。府内では全域で越冬する。越夏例はあるものの、繁殖確認例はない。

◎**府内の分布区域** 全域。

生態的特性

営巣環境は山間部の広葉樹林やアカマツ林で、非繁殖期は林地に広く出現し、主に鳥類を捕食する。樹木の高さ 4~8mの枝上に巣をつくり、一腹 4~5卵を産み、約 35日間抱卵し、約 28日間育雛する。

生息地の現状

府内では広く林地に出現する。冬期の観察例は少ないものの比較的普通である。繁殖期にも少数の観察例があるが、繁殖しているかどうかは不明。今後、越夏情報に注目する必要がある。

必要な保全対策

越夏情報も含め生息情報の継続的収集が必要。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

ノスリ

タカ目タカ科
Buteo buteo

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少なくはないが、近年減少している。	生息地の現状	府内では山林や面積の広い農耕地や河川敷などで比較的普通に見られるが、観察頻度は以前に比べると減少傾向にある。
形態	全長54cm。翼開長122～137cm。翼の下面は淡褐色で風切羽の先端は黒く、翼角の黒白斑が目立つ。	生存に対する脅威	圃場整備や河川敷の整備などによる中小の餌動物の減少の影響が考えられる。
分布	北海道～四国の低山の林で繁殖する。府内では冬鳥として全域に渡来する。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	越冬環境の詳細な把握が必要。
生態的特性	開けた場所(草地、伐採地、農耕地など)でハンティングを行い、ノネズミなどの小型哺乳類を空中から探索して捕食することが多い。		

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

フクロウ

フクロウ目フクロウ科
Strix uralensis

環 なし

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なくはないが、近年減少している。	生息地の現状	樹洞のある老木がある社寺林などの営巣地と、ネズミの多い農耕地が連続している環境で繁殖している。
形態	全長48～52cm。翼開長94～102cm。体はトラフズクより大きくて、尾は比較的長い。翼は短くて幅が広い。耳羽はない。顔盤は灰褐色。目は黒くて比較的小さい。体の下面は白地に黒い縦斑がある。	生存に対する脅威	農耕地と営巣木のある社寺林等が分断されること。
分布	留鳥として全国に生息する。府内においても全域に生息している。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	巣箱の設置が有効な場合もある。
生態的特性	夜間、ネズミを採食する。樹洞で営巣し、一腹2～4卵を産み、メスが抱卵と育雛をする。		

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

アオバズク

フクロウ目フクロウ科
Ninox scutulata

環 なし

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少なくはないが、近年減少している。	生態的特性	夕方から夜にかけて昆虫(セミ、ガ、甲虫)などを採食する。樹洞で営巣し、一腹3~5卵を産む。
形態	全長27~31cm。翼開長66~71cm。耳羽はない。頭部から体の上面は一樣に黒褐色で、尾には黒帯がある。目は黄色。体の下面は白地に黒褐色の太い縦斑がある。	生息地の現状	京都市内の社寺林にはアオバズクが多く生息しているが、近年減少している。
分布	夏鳥として全国に渡来し、平地から標高1000m程度の山地に生息する。府内全域にも夏鳥として渡来する。冬期はフィリピンなどへ渡る。 ◎府内の分布区域 全域。	生存に対する脅威	台風などにより老木が折れ、営巣に適した樹洞がなくなることが減少原因の一つとなっている。
		必要な保全対策	巣箱の設置が有効な場合もある。

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)、富田(1990)

執筆者 須川恒、和田岳

鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

アリスイ

キツツキ目キツツキ科
Jynx torquilla

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	開けた林や林縁などに生息する。アリを中心に昆虫やクモ類を採食する。他の鳥などがあけた樹洞を利用して営巣する。一腹7~10卵を産み、雌雄が抱卵する。
形態	全長18cm。他のキツツキ類と異なり尾は角形。体は褐色と黒と灰色の複雑な虫食い状斑で、頭上から背の中央に走る黒線が目立つ。	生息地の現状	府内では冬期に深泥池内の浮島や、河畔林などの明るい灌木林で少数が観察される。
分布	夏鳥として北海道と東北地方北部の一部に渡来し、本州中部以西で越冬する。府内では深泥池などで冬期観察される。 ◎府内の分布区域 南部地域。	必要な保全対策	越冬環境の詳細な把握にたった保全が必要。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

アカゲラ

キツツキ目キツツキ科
Picoides major

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なくはないが、近年減少している。

形態

全長24cm。オオアカゲラより少し小さくて、嘴は比較的短い。肩羽の先が白いので背に逆八の字の白斑となって見える。オスは頭頂が黒く後頭だけ赤色。メスは後頭も黒い。

分布

北海道、本州に分布し、九州、四国では繁殖せず観察例は少ない。府内では広く分布しているが、アオゲラに比べると生息域は狭い。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

木の幹にとまり昆虫を採食する。また、マツなど針葉樹の種子もよく食べる。枯れかけた木の幹に穴を掘り、一腹4~6卵を産む。雌雄交代で12~15日間抱卵する。

生息地の現状

府内の山林に広く分布しているが、近年密度が減少している。

必要な保全対策

生息環境のモニタリングを進め保全課題を明らかにする必要がある。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

チゴハヤブサ

ハヤブサ目ハヤブサ科
Falco subbuteo

環 なし

選定理由

春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長28~31cm。翼開長69~76cm。ハヤブサより小さくハトと同じ大きさ。胸と腹には黒色の縦斑があり、腿と下腹は赤茶色。

分布

北海道と東北北部で少数繁殖し、冬は本州中部以南に生息する。府内では秋の渡り期に観察される。冬期にも観察されることがある。

◎府内の分布区域 南部地域。

生態的特性

河口、農耕地、原野などに生息し、空中で小鳥やトンボ等を捕る。繁殖地では、カラスなどの古巣を利用して営巣することが多い。

生息地の現状

府内では、渡りの時期に小鳥などが多数立ち寄る森林によく出現するといわれる。

必要な保全対策

生息環境のモニタリングを進め保全課題を明らかにする必要がある。

文献 日高(監)(1996)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

サンコウチョウ

スズメ目カササギヒタキ科
Terpsiphone atrocaudata

環 なし

選定理由

夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長オス 45cm、メス 18cm。オスの尾はととも長い。オスの頭部、胸、脇は紫黒色、背は紫黒褐色で、尾は黒い。メスの尾はオスより短い。

分布

夏鳥として本州以南に渡来する。冬期はインドシナ半島などへ渡る。府内では繁殖例は少ないものの、南部地域と北部地域から新しい繁殖地が次々と見つまっている。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

薄暗く林床の開けた広葉樹林やスギ・ヒノキの植林地を好み、昆虫を空中で捕食する。樹木の枝の分岐部に巣をつくり、一腹 3~5 卵を産み、雌雄交代で 12~14 日間抱卵する。

生息地の現状

府内では、よく茂った落葉広葉樹林、老齢のスギ・ヒノキ林に少数が渡来して繁殖する。

生存に対する脅威

姿態が美しいため、しばしば写真の対象とされ、マナーの悪いカメラマンに営巣妨害されることがある。

必要な保全対策

営巣地の厳重な保護が必要である。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

コクマルガラス

スズメ目カラス科
Corvus dauuricus

環 なし

選定理由

冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

形態

全長 33cm。小型のカラスで嘴が短い。淡色型と暗色型がある。淡色型は後頸、頸側、胸、腹は白い。暗色型は、後頸と頸側が黒淡色。

分布

東アジアの高中緯度帯で繁殖し、中国南部などへ渡る。国内では主に九州地方に渡来するが、近年ミヤマガラスとともに越冬地が東へ拡大している。府内でも巨椋干拓地で越冬が確認されている。

◎府内の分布区域 南部地域。

生態的特性

平地の広い農耕地が主たる生息地である。昆虫などを採食する。冬はミヤマガラスの群中に混じっているのが普通。

生息地の現状

府内では巨椋干拓地で越冬するミヤマガラスの群れの中に少数が混じっている。

必要な保全対策

越冬環境のモニタリングを進める必要がある。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★ **新**

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)リスト外

ツリスガラ

スズメ目ツリスガラ科
Remiz pendulinus

環 なし

選定理由	個体数が少ないので、越冬個体群として準絶滅危惧種と判断した。	生息地の現状	宇治川などの河川敷にあるヨシ原で越冬する。
形態	全長11cm。小さくて嘴は尖る。オスの頭上は灰色で、白い眉斑と黒い過眼線が目立ち、背は赤褐色。メスでは頭上も過眼線も褐色味がある。	生存に対する脅威	河川改修や池の埋め立て・改修などが、越冬地となっているヨシ原の破壊につながる可能性がある。
分布	ユーラシア大陸中緯度地域で繁殖し、冬鳥として沖縄から本州中部にかけて渡来し平地のヨシ原で越冬する。本種はかつては迷鳥であったが、1970年代以降越冬域を東に広げたため西南日本では普通の冬鳥となった。	必要な保全対策	越冬地となるヨシ原の保護が必要である。
生態的特性	繁殖地では湿地や林の中の樹木の枝に、文字通り袋状の吊り巣をつくる。越冬期は水辺に近い河口、川岸、海岸のヨシ原に群れで生息し、ヨシの茎の鞘を嘴ではいで中にいる昆虫類(カイガラムシなど)を食べる。	改訂の理由	越冬地分布拡大期は少なくはなかったが、最近では個体数が少ないので、改訂した。

文献 江崎、和田(編)(2002)、日高(監)(1996)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

ゴジュウカラ

スズメ目ゴジュウカラ科
Sitta europaea

環 なし

選定理由	留鳥として年中府内に生息する。個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	本州中部では標高1,000m程度の山地の落葉広葉樹林に多いが、北海道では平地にもいる。樹の幹に縦に止まったり、逆さに止まったりする。昆虫や種子を採食する。樹洞やキツツキの古巣で営巣する。
形態	全長14cm。頭上から体の上面は青灰色、白くて細い眉斑と黒い過眼線があり、下面は白くて脇は橙色、下尾筒は白と茶褐色の斑。	生息地の現状	府内では芦生、八丁平、大江山などのブナ、ミズナラの落葉広葉樹林に少数が生息する。
分布	九州以北の山地に留鳥として生息する。府内では芦生、八丁平、大江山、青葉山など生息地は限られており、個体数も少ない。 ◎府内の分布区域 全域(局所的)。	必要な保全対策	ブナ、ミズナラの落葉広葉樹林の保全。

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



京 準絶滅危惧種
(旧 2002)絶滅危惧種

キバシリ

スズメ目キバシリ科
Certhia familiaris

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。個体数は少ない状態と判断した。近年減少はしていない。

形態

全長14cm。嘴は細くて下へ曲がり、尾は細くて先が尖る。足は細いが強く、足指が長い。体の上面は茶褐色と白の縦縞、眉斑は白く過眼線が褐色。下面は白。飛ぶと翼に黄褐色の細い線が出る。雌雄同色。

分布

ユーラシア大陸や北アメリカ大陸の中緯度地帯に分布する。国内では留鳥として、九州より北に分布。府内では局所的に周年生息している。

◎府内の分布区域 全域(局所的)。

生態的特性

亜高山帯の針葉樹林や落葉広葉樹林に生息する。ほぼ年間を通して繁殖地に留まる。食物は主に、鱗翅類・甲虫類などの昆虫やクモ類である。巣は幹の裂け目、樹洞につくるほか、巣箱を利用することもある。一腹

卵数は4~5卵で、メスが約14日抱卵し、約14日で巣立つ。非繁殖期はカラ類の混群に混じることがある。

生息地の現状

府内では芦生、愛宕山、比叡山などに周年生息するが、局所的で個体数は極めて少ない。ブナやミズナラなどの落葉広葉樹林、スギやモミなどの古木のある混交林に生息している。

生存に対する脅威

林道建設などによる森林の縮小化や分断化の影響を受けるとされる。

必要な保全対策

ブナ、ミズナラの落葉広葉樹林の保全。

改訂の理由

極めて少ないと判断していたが、比較的確認記録もあり、少ないと判断しなおした。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、中村桂子



鳥類
(準絶滅危惧種)



京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

トラツグミ

スズメ目ヒタキ科
Turdus dauma

環 なし

選定理由

留鳥として年中府内に生息する。個体数は少なくはないが、近年減少している。

形態

全長30cm。大型ツグミ類の中で最も大きい。体は黄褐色の地に黒色の横斑や三日月斑がある。中央尾羽は暗黄褐色、外側尾羽の先端が白い。

分布

留鳥として本州、四国、九州に分布し、北海道は夏鳥として渡来する。府内には留鳥として全域に分布するが、近年減少している。

◎府内の分布区域 全域。

生態的特性

低山から深い山地で繁殖し、冬期は平地の公園などでも観察されることがある。昆虫、ミミズのほか、果実も食べる。樹上に営巣し、一腹3~5卵を産み、約14日間抱卵する。

生息地の現状

府内では繁殖期は低山から深い山地の山林に生息し、冬期は小河川の水辺林などでも観察されるが、近年個体数が減少している。

必要な保全対策

特に繁殖環境の詳細な把握が必要である。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 準絶滅危惧種

クロツグミ

スズメ目ヒタキ科
Turdus cardis

環 なし

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	府内では、夏鳥として、大江山、青葉山、八丁平、比叡山などに渡来して繁殖する。
形態	全長22cm。大型ツグミの中では小さい。オスは頭部、胸、背、翼、尾は少し灰色味のある黒色、腹は白くて上腹部と脇には黒い三角斑が並ぶ。メスは上面茶褐色で、下面は白く、胸側から脇は橙黄褐色。	生態的特性	地上で昆虫やミミズを、樹上で果実などを採食する。メスが樹上に巣をつくり、一腹3~5卵を産む。
分布	夏鳥として九州以北に渡来する。西南日本では少数が越冬することもある。府内では、夏鳥として数か所に渡来する。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	繁殖環境の詳細な把握が必要である。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002) 絶滅危惧種

コルリ

スズメ目ヒタキ科
Erithacus cyane

環 なし

選定理由	夏鳥として府内に生息して繁殖する。繁殖個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生息地の現状	府内では山地のササが繁茂した落葉広葉樹林に少数が生息する。芦生の繁殖群は減少傾向である。
形態	全長14cm。他の小型ツグミ類ほど姿勢が直立していない。オスは上面が暗青色であり、目先、喉の両側は黒く、下面が白い。メスは上面がオリーブ褐色で尾には少し青みがある。幼鳥は頭部がオリーブ褐色。 ◎近似種との区別 ルリビタキの脇は橙色。	生存に対する脅威	八丁平における林道建設、大江山における森林伐採、あるいはシカ害が生息の脅威となる可能性がある。
分布	夏鳥として本州中部以北、西日本の一部に渡来する。越冬地は、インドのアッサム地方から東南アジア。府内にも夏鳥として渡来し、大江山、芦生、八丁平で繁殖していると思われる。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	繁殖環境の詳細な把握が必要である。
生態的特性	広葉樹林や混交林に生息し、主として昆虫食。繁殖期は4~7月。一夫一妻で繁殖し、なわばりは約1ha。巣は地上のくぼ	改訂の理由	極めて少数でなく、少数が夏期に生息しているため改訂した。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、中村桂子

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

ムギマキ

スズメ目ヒタキ科
Ficedula mugimaki

環 なし

選定理由	春秋の渡りの時期に旅鳥として府内に滞在する。滞在する個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	双翅類などの昆虫を空中で捕らえる。
形態	全長 13cm。オスの体の上面と頬は黒くて、眉斑は小さくて白い。三列風切外縁、大雨覆、外側尾羽の基部は白い。メスは上面が褐色、下面は橙黄色。	生息地の現状	府内では、渡り期に低山や山麓のマツの混ざるやや茂った林で少数が観察される。
分布	中国東北部や沿海地方などの針葉樹林で繁殖し、中国大陸南東部や東南アジアで越冬する。旅鳥として全国に渡来する。特に日本海側の島嶼に多い。府内では春秋の時期に少数が観察される。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	春秋の渡り時期の中継地の環境の把握が必要である。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳



鳥類
(準絶滅危惧種)

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

ハギマシコ

スズメ目アトリ科
Leucosticte arctoa

環 なし

選定理由	冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。	生態的特性	海岸や山地の岩場などで繁殖し、冬期は山地や海岸の裸地や崖地で、数羽～数十羽の群れが見られる。草本や灌木の種子を採食する。巣は岩場の陰に枯れ草を集めてつくる。
形態	全長 16cm。オスでは前頭と顔、喉が黒く、後頭から後頸は黄褐色で目立ち、胸腹翼の一部、腰はバラ色と黒が混ざる。メスは全体に色が鈍くて後頭の黄褐色部は褐色味が強く、下面や腰のバラ色は淡い。	生息地の現状	府内では山林と隣接して草地がある場所で観察される。
分布	極東からアラスカにかけて繁殖し、冬鳥として全国に渡来する。府内では冬鳥として少数が渡来する。 ◎府内の分布区域 全域。	必要な保全対策	越冬環境の詳細な把握が必要である。

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、日本野鳥の会京都支部(2013a)、高野(1982)

執筆者 須川恒、和田岳

★★

京 準絶滅危惧種
(旧 2002)準絶滅危惧種

イスカ

スズメ目アトリ科
Loxia curvirostra

環 なし

選定理由 冬鳥として府内で越冬する。越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない。

生態的特性 冬期も針葉樹林に生息し、マツやスギなどの球果を食い違った嘴でこじ開けて種子を採食する。繁殖はこれらの種子の豊凶に左右される。

形態 全長17cm。頭は大きく尾は短く、嘴は大きくて、食い違っている。オスの体は褐朱赤色、メスはオスの赤色部が黄緑色である。

生息地の現状 府内では冬期に、比叡山などに数羽～30羽程度の群れで出現する。年によって渡来数は大きく変動する。アカマツ林やアカマツ混交林でマツの実を採食する。造巣行動が観察されたこともある。

分布 ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の中緯度地帯の針葉樹林で繁殖し、冬鳥として九州以北に渡来するが、本州中部以北の一部では少数が繁殖している。府内には冬鳥として、比叡山などに少数が渡来する。

必要な保全対策 継続的に越冬環境を把握することが必要である。

◎府内の分布区域 南部地域。

文献 日高(監)(1997)、京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、和田岳

★

京 要注目種
(旧 2002)要注目種

オオミズナギドリ

ミズナギドリ目ミズナギドリ科
Calonectris leucomelas

環 なし

選定理由 夏鳥として府内に生息して集団繁殖する。個体数は少なく、近年減少もしていないが、集団営巣地に限られている。

された魚などを雛に与える。

形態 全長49cm。翼開長122cm。日本産ミズナギドリ類の中で最も大きい。頭上から顔にかけて、白地に黒褐色の斑点がある。

生息地の現状 冠島はタブなどの森で覆われており、約10万羽～20万羽が生息するとされてきた。しかし1970年代に較べると巣密度が減少しているようである。

分布 日本近海の離島で集団営巣する。フィリピン近海などで越冬。府内では舞鶴市冠島で集団営巣し、杓島でも少数が営巣する。

生存に対する脅威 ドブネズミによる雛の捕食。重油事故。

◎府内の分布区域 北部地域の海域。

生態的特性 2mほどの深さの巣穴を掘って奥に1卵を産み、雌雄で抱卵・育雛する。半消化

必要な保全対策 継続的な個体群調査が必要である。

文献 京都府(1993)、須川(2006)、高野(1982)、吉田(1981)

執筆 須川恒、狩野清貴

★

京 要注目種
(旧 2002)要注目種

ウミネコ

チドリ目カモメ科
Larus crassirostris

環 なし

選定理由 留鳥として年中府内に生息し集団繁殖する。繁殖個体数は少なく、近年減少もしていないが、集団営巣地に限られている。

生態的特性 斜面にカップ状の巣をつくり、1～3卵を産む。雌雄が抱卵・育雛する。イワシなどの浮魚を採食する。

形態 全長47cm。翼開長120cm。背や翼の上面は濃青灰色で初列風切の先は黒く、尾の基部は白くて先は黒い。足は黄色。

生息地の現状 舞鶴市杓島には数千巣の集団営巣地がある。近年、舞鶴市冠島に集団営巣地が一時的にでき、丹後半島の漁港の防波堤にも約100巣の集団営巣地がある。

分布 国内に留鳥または漂鳥として生息する。沿岸や周辺の離島で集団営巣する。府内には舞鶴市杓島に集団営巣地がある。

生存に対する脅威 釣り人などの上陸による攪乱。

◎府内の分布区域 北部地域。

必要な保全対策 継続的な個体群調査が必要である。

文献 京都府(1993)、真木、大西(2000)、高野(1982)

執筆 須川恒、狩野清貴

●2015年改訂でリスト外になった種

和名	目名・科名	学名	旧カテゴリー (2002)	環境省カテゴリー (2012)	変更理由など
イワツバメ	スズメ目 ツバメ科	<i>Delichon urbica</i>	準絶滅危惧種	なし	北山などの山地では、繁殖期に多数の個体が見られ、橋の下での営巣を確認することも多いので。
タカブシギ	チドリ目 シギ科	<i>Tringa glareola</i>	準絶滅危惧種	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	秋期に、例えば巨椋干拓地を多数が通過するので減少はしていないと判断したため。
オオマシコ	スズメ目 アトリ科	<i>Carpodacus roseus</i>	準絶滅危惧種	なし	定期的に特定の地域に渡来する可能性がない迷行種と判断しなおした。
コイカル	スズメ目 アトリ科	<i>Eophona migratoria</i>	準絶滅危惧種	なし	定期的に特定の地域に渡来する可能性がない迷行種と判断しなおした。
ホシガラス	スズメ目 カラス科	<i>Nucifraga caryocatactes</i>	準絶滅危惧種	なし	定期的に特定の地域に渡来する可能性がない迷行種と判断しなおした。



鳥類

鳥類 ● 文献一覧

- 江崎保男、橋口大介、金沢正文、今堀るみ子、池田善英 (2000) 京都府南部の孤立林でのオオタカの繁殖と越冬 *Jpn J Ornithol* 48: 267-279
- 江崎保男、和田岳 (編) (2002) 近畿地区・鳥類レッドデータブック 京都大学学術出版会 京都
- 遠藤孝一 (1989) オオタカ保護の現状と問題点 *Strix* 8: 233-248
- 伏原春男 (1989) 伏原春男遺稿 私家版
- 日高敏隆 (監) (1996) 日本動物大百科3 鳥類I 平凡社 東京
- 日高敏隆 (監) (1997) 日本動物大百科4 鳥類II 平凡社 東京
- 平田和彦 (2004) 同志社高校におけるヒメアマツバメの営巣記録 *Nature Study* 50 (2) : 11
- 飯田知彦 (2001) 人工構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策 *Jpn J Ornithol* 50 (1) : 43-45
- 河合敏雄 (1989) 京都の野鳥図鑑 京都新聞社 京都
- 環境庁 (編) (1981) 日本産鳥類の繁殖分布 大蔵省印刷局
- 環境庁 (編) (1988) 動植物分布調査報告書 (鳥類) 日本野鳥の会
- 環境庁自然保護局、日本野鳥の会 (1988) 動植物分布調査報告書 (鳥類の集団営巣地及び集団ねぐら) 日本野鳥の会
- 環境庁自然保護局生物多様性センター (1999) 生物多様性調査鳥類調査中間報告書
- 黒田長久 (編・監) (1984) 決定版 生物大図鑑鳥類 世界文化社
- 京都府 (1979) 京都の野鳥 (京都野鳥の会編) 京都府農林部林務課
- 京都府 (1993) 京都の野鳥 京都府
- 京都府 (1998) N号重油流出事故に係わる環境影響調査 京都府環境管理課
- ロプコフ EG (1988) カムチャツカで繁殖する鳥類I (藤巻裕蔵訳) 極東鳥類研究会
- 真木広三、大西敏一 (2000) 決定版 日本の野鳥590 平凡社 東京
- 増田章 (1998) 舞鶴のミサゴ (1) ソングポスト (92) : 16
- 増田章 (1999a) 舞鶴のミサゴ (2) ソングポスト (96) : 11
- 増田章 (1999b) 舞鶴のミサゴ (3) ソングポスト (101) : 15
- 中村浩志、須川恒 (1974) 京都府の鳥類 京都府の野生生物 京都府 103-128
- 中川宗孝 (1999) 南山城「市町村別鳥類目録」 私家版
- 永井力男 (1995) 久美浜湾の大白鳥——観察記録 1980～1994 22pp. 私家版
- ネチャエフ VA (1995) サハリンの鳥類1 (藤巻裕蔵訳) 極東鳥類研究会
- 西村昌彦 (1979) カワセミとヤマセミの造巣場所選択について 山階鳥研報 11: 39-48
- 日本鳥学会目録編集委員会 (2000) 日本鳥類目録 改訂第6版 日本鳥学会 帯広
- 日本鳥学会目録編集委員会 (2012) 日本鳥類目録 改訂第7版 日本鳥学会 兵庫
- 日本野鳥の会京都支部 (1997) 深泥池野鳥観察記録 日本野鳥の会京都支部
- 日本野鳥の会ひょうご (2013) ひょうごの鳥 2010 日本野鳥の会ひょうご
- 日本野鳥の会京都支部 (2013a) 京都府内を訪れた珍客 ソングポスト (180: 2013年2～3月号別冊) : 1～4
- 日本野鳥の会京都支部 (2013b) 京都府の鳥チェックリスト 第4版 ソングポスト (181: 2013年4～5月号別冊)
- 日本野鳥の会滋賀支部 (2010) 滋賀県の鳥 2010 におのうみ 20号記念誌
- 二村一男 (1990) ツミの幼鳥を観察 ソングポスト (46) : 22
- 佐々木凡子 (2001) 京都府におけるサギ類の集団営巣地の分布と保護 *Strix* 19: 149-160
- Sato F, Karino K, Oshiro A, Sugawa H, Hirai M (2010) Breeding of Swinhoe's Storm-Petrel *Oceanodroma monorhis* in the Kutsujima Islands, Kyoto, Japan. *Marine Ornithology* 38: 133-136
- 須川恒、中田千佳夫 (1981) 深泥池の鳥類相 深泥池の自然と人 京都市 277-282
- 須川恒 (1982) 宇治川河川敷のツバメ類の集団時とその保護について 関西自然保護機構会報 (8) : 25-30
- 須川恒 (1986) 京都の鳥類 京都の野生動物I (京都の動物編集委員会編) 法律文化社 168-174
- 須川恒 (1991) 京都市の都市鳥 全国主要都市の都市鳥 1990 (都市鳥研究会編) 86-89
- 須川恒 (2001) 日本海重油流出事故における京都北部海岸域の海鳥保護調査活動体制 ナホトカ号油流出事故における海鳥被害調査活動記録 油汚染海鳥被害委員会 361-365
- 須川恒 (2005) 都市河川と水鳥 いのちの森——生物親和都市の理論と実践 (森本幸裕、夏原由博編) 京都大学学術出版会 185-213
- 須川恒 (2006) 冠島とオオミズナギドリ——生活史と標識調査 *ALULA* (33) : 24-29
- 須川恒 (2013) 2012年度経営学特別講義録 京都の自然と産業——野鳥が語る京都の自然 龍谷大学京都産業学センター 19-43
- 高野伸二 (1982) フィールドガイド日本の野鳥 日本野鳥の会
- 都市鳥研究会 (編) (1991) 全国主要都市の都市鳥 都市鳥研究会
- 富田良雄 (1990) 古都の夏に生きる——糺の森のアオバズク観察記 *アニマ* (215) : 49-55
- 脇坂英弥、中川宗孝 (2005) 京都府木津川における繁殖中のイソシギ成鳥とヒナの標識記録 日本鳥類標識協会誌 18 (2)
- 吉岡景昭 (1992) 舞鶴市 1991年2, 5～8月の鳥 ソングポスト (54) : 14
- 吉田直敏 (1981) 奇鳥オオミズナギドリ樹に登る海鳥 汐文社